

実際には、この二つに共通点はほとんどない。——少なくとも、歴史上、現時点においては。フロムのヨーロッパの社会民主主義運動にたいする誤った分類は、フロムがその運動に彼自身の思想の多くを融発されているのだが、下意識の抑圧が働いていた一つのよい例である。

提案されている第四の選択は、持つことと在ることのあいだの本質的な違いを根拠にしている。このような概念は、二つの根本的に違った存在の様式をあらわしており、それが、個人的性格や社会的性格の構えにどれくらい影響をおよぼすかによって、まったく正反対ともいえる人生経験の原因となる。詩や文学からはじまって日常言語にいたるまで、さまざまな例によって、人間が何を所有するか、あるいは何を消費するかということにもとづいて、人間自身を定義する傾向を徐々に獲得してきた事実がしめされる。疎外された人間は、自分自身の性格の構えのなかに、一般的にいって全体としての資本主義社会の社会的性格を写したものを受け入れがちである。学ぶことは、考えをダイナミックに成長させ、それを交換しあうことではなく、データと情報の蓄積として受けとられる。能動性と社会的相互作用の広い領域が、このような根本的に二つの相容れない見地からアプローチされる。「持つ」人間は物質的所有、地位、蓄積された知識などに不可避的に依存しがちなのにたいして、「在る」人間はあたえられた挑戦や出会いに自発的に反応する。とくに危険なのは、「持つ」人間が自分が命令されないで権威を振りかざす力をあたえられた時である。ある政治的指導者は、「……馬鹿であり、不道徳であり、悪である。すなわち、まったく権威とはほど遠い存在であるが、それにもかかわらず彼は権威をもっている」。受容的、あるいは「持とう」とする性格の持ち主もまた、「人間における自由」や「悪について」で議論された性格特性を参照)本質的に愛することができない。生産的な愛は、愛する人間の所有とはなんら相通するところはないからである。愛にかんする章は、「愛するということ」のいくつかの中心思想を、き

わめて煮つめて説明している。

この本の第二部で、フロムは彼の初期の著作で使った多くの概念の要点を繰り返す。マイスター・エックハルト——彼が二つの様式を簡潔に定義したのだが——に加えて、フロムはR・H・トニーやマックス・ステイルナーの洞察に満ちた作品である『エゴと彼自身——権威に抗する個人の場合』⁽⁵⁾を引用し、そして、ついに、トニーの『獲得社会』の記述のなかに少なからずカール・マルクスをとりあげて、財産に馮りつかれたブルジョワジーは、徐々にあらゆる個人的関係において全体的な墮落におちいった。人びとは物としてとり扱われ、それに合わせて操作される。資本主義社会は、個人のエゴの意識をとんでもない高さにまで引き上げてしまった。すなわち、自分自身のエゴはもっとも高価な財産であり、肉体的特質や、技術、社会的地位、富などという言葉で定義される。その時、獲得することがすべての行動の最終的ゴールである。一九世紀の資本主義と対照的なのは、商品はそれが一度獲得されるや、その固有の価値を失うことである。それらは安々と捨てられ、より新しい、より良い「モデル」に取って代わられる。消費し捨てざる過程は、絶えず受容的な個性のエゴを太らせるが、その人の人生を豊かすることはほとんど、あるいはまったくない。それどころか、人が持つことと、消費することに馮りつかれればつかれるほど(消費はしばしばもっとも良い「取引き」をしようとして、雪だるま式の交換をひきおこし、その都度一時的なエゴがかりたてられる)、内面的な強さをもった成長や成熟の可能性は、ますます失われる。別の言葉で言えば、物や所有によってあおりたてられるあらゆるエゴの背後には、人間の個性のしなびた遺物があるにすぎない。

若い世代の多くは——とくに一九六〇年代に——心ない消費主義と持つという存在様式を拒否した。彼らは両親のみじめさから自分たちを解放ししたが、フロムが正確に診断するように、それと同時に



新しい、根本的に違う価値体系をうちたてることには失敗した。ただ、抗議し、拒否するだけではたしかに「新しい」人間の創造のための道具としては十分ではない。持つことにたいする有効で、永続する對抗概念が、活性化した運動を支えるために作動しなければならぬ。それらが欠けていたため、多くの若者が彼らの試みに失敗したのだ。実際、彼らの叛乱は、獲得社会「からの」自由はもたらしたが、存在の成熟した状態を達成「する」自由の形成には至らなかった。結局は、多くの若者が諦め、彼らが短期間退けていた古い生活形態に戻った。「大きな希望を抱いて始めたすべての者が、失望して幕を引いたのではないが、不幸なことにその数がどれくらいかを知ることが不可能である。」⁽³⁸⁾にもかかわらず、静かな反抗の炎が再び燃え上がるかも知れないという希望はまだある。すなわち、消費主義と持つという形態に反対し、病氣から正常への社会の変質に向かう反抗である。

在るといふ様式にたいして、フロムは二つの基本的な前提を提出する。能動性と利他主義である。こういった性格特性とその精神的なモデルは——アリストテレスやマイスター・エックハルト、スピノザ、マルタスの哲学として——フロムのこれまでの著作のなかで、『自由からの逃走』に始まり、性格学にかんする多くの本や『正気の社会』をとおして、広範に議論されてきた。だが、連帯と敵対とのあいだの区別にかんして、新しく、重要な観点が、二つの社会的に条件づけられた、まったく相容れない存在の形態として、導入されている。獲得社会における人間関係は、おおかた貪欲、冷酷さ、競争、そして敵対によって特徴づけられる。所有を失うことや、もっと広い意味での、より多くの商品と地位向上のための競争的な戦いに敗れることにたいする恐怖は、それなしでは不具者と感じざるをえないよう作用する。個人も集団も、この広く行きわたった恐怖によって性格構造を歪められている。連帯の代わりに敵対が多く、社会的相互関係を規定する。敵対の別の側面である貪欲は、けっして現実には満たされるこ

とがない。というのは、それは「どんなに貪欲が満たされようが、克服されうるはずの内面の空虚さ、倦怠、淋しさ、憂鬱を満たさない」⁽³⁹⁾からである。このような観察の多くは、すでに一九世紀の社会主義者モーゼス・ヘスの作品、ショーペンハウアーの警句、フランスの哲学者ジュールジュ・パティユや実存主義者マルティン・ハイデガーの後期の著作に見られる。フロムのアプローチの獨創性は——これは存在論的な範疇ではガブリエル・マルセルの「在る」という思想との比較においても同様に見えることだが——繰り返すが、フロムが個人的な性格の構えと社会的性格の構えとのあいだにうち立てることができた一貫した因果関係にある。そこから、彼が彼の理論を多くの国家を包含するより大きな共同社会と、そこでの生活様式に繰り広げていくのはきわめて当然である。このように地球的な規模にたてば、さまざまな国家のあいだの関係を規定する要因である貪欲と恐怖の相互作用は、平和にたいする恒久的な脅威をあらわしている。フロムは永久の平和は、持つ構えを在る構えに置き換えることによってのみ達成できると結論しているのは正しい。諸国家の連帯が図られなければならず、敵対は根絶されねばならぬ。

この本の最終部（「新しい人間と新しい社会」）は、有害な持つ様式を人間的に方向づけられた在る様式に変える実際の側面を扱っている。ひたすら経済構造の根本的再構成をするだけでは大規模な変化は達成できないと、フロムは言う。彼はまた、個人の性格の構えを変えるだけで、新しい社会が出現するという考えも、同様に排除する。かりにそのような個人の意識だけが別個に進歩することが可能であったとしても、それは、より大きな社会組織という関係のなかでは、効果がないだろうし、私的な領域に限られるだろう。彼は、ここ数年市場的な性格の構えが、「サイバネティックスの信仰」とともに、西欧社会において広範な基盤を確立したのを観測している。受容的タイプは未発達ながらも、個性の



痕跡を残しているのにたいし、市場的な構えは識別できる程度のエゴさえもっていない。パーソナリティ・マーケットの命令に完全に適応することが、市場的な構えの根本的な特性である。市場的な人間は、感情的経験をしない。すなわち、彼は愛することもなければ、憎むこともない。彼らは、完全に疎外された存在というマルクスの定義の純粋な化身だ。(この性格タイプにかなるもつと徹底した論議は、この本の七章と八章において『悪について』と『正気の社会』をそれぞれ分析するなかに提供しておいた。)ここで、フロムはミカエル・マッコビーとイグナジオー・ミランによって完成された二つの社会調査を引用している。両方とも、企業の重役によく見られがちな感情や気分志向を調査したものであり、完全な市場商人という新しい人種にかんしてこの上なく啓発的なものである。サイバネティクスにたいする信仰、すなわち、データ処理をとおして人間存在のあらゆる形態を予想し、操作することにかぎらない信頼を示すことの急速な広がり結びついて、このような性格の構えはあらゆる人間主義的な再生にたいする恐るべき障害となっている。フロムの意見では、根源的な人間主義と、社会的性格および個人の生活の見通しの両者を同時に再構成していくことだけが、人類の生存にとって必要な変革をもたらすことができる。

フロムは「不健康な人間存在という対価を支払ってのみ可能な健全な経済」という現在の状況は、終わりにしなければならないと言ふ。資本主義社会と共産主義社会の両方に現存する性格の構えを見ると、フロムは持つ構えが、人間性の避けられない部分であるということを一少なくとも、進歩の現時点において一容認することにやぶさかではない。だが、彼はもはやそれが荒れ狂うのを許すわけにはいかないと主張する。すなわち、それは理性によって統制され、とりこまなければならない。言い換えれば、持つ様式は、在る様式の新しい復活によって抑えられなければならない。E・F・シュエーマー

に加えて、フロムはアメリカの生態学者ポール・R・エールリッヒやアン・H・エールリッヒの作品(共著『人口・資源・環境、ヒューマン・エコロジーの世界』⁽³⁸⁾)と、ドイツの社会民主党员、エアハルト・エッブラーの作品を引用する。これらはすべて地球の自然資源のおびただしい枯渇と、人間存在の片意地な自己破壊に焦点を合わせている。狂気は、それがどんなに感染しやすかろうが、今や停止されねばならない。新しい「人間の科学」が、野放しな科学技術と制度化された人間性を制御する道具となるというゴールに向かって創造されねばならない。

その第一歩として、フロムは、工業生産を「正常な」消費に向かって再構成することを提案する。現存する食品医薬品局の延長線上に、健康的消費かどうか裁定する基準をもつ政府機関が設立されなければならないだろう。このような大衆的な方向づけは、生産にたいする株主や経営者の支配が、法令や新しい消費者の自覚(必要で、損害をあたえるような商品を排斥すること)によって根本的に縮小されたときにのみ力をもつだろう。これらすべては「……巨大企業の政府にたいする大きな威力(それは日ごとに強くなっている)」と人びとにたいする大きな威力(洗脳による思考統制による)が破られる」という条件のもとでだけ実体化される。合衆国における既存の政治的、経済的権力構造について初歩的な知識さえ持っている人は誰でも、これはまったくユートピア的な提案だということにすぐに気がつくだろう。明らかに、フロムは判っていない。彼は、『正気の社会』や『希望の革命』で提案した政治的、文化的変化を短く繰り返して、在る様式の再活性化というプランを描きつづける。つまり、責任をもつ市民による国民会議の制定である。それは、すなわち、直接参加の民主主義の履行のための草の根運動であり、より小さな規模の地方分権化や、生産計画への労働者の参加であり、社会のすべての構成員に最低年収を保証することである。



そこから、フロムは新しい世界の出現がもたらす一連の本質的な条件を提出するが、それは次のように要約されよう。産業広告であれ、政治広告であれ、あらゆる「洗脳の手段」は禁止されねばならない。豊かな国々は、発展の遅れている国々を搾取することをやめねばならない。婦人は、家父長制に従属させられることから解放されねばならない。正確な情報、効果的な方法で行き渡らせられなければならない。科学研究は、もはや利益にも国防にも奉仕すべきではない。そして最後に、核軍縮が、早急に実現されねばならない。辛辣にならなくても、機敏な読者ならば、合衆国の現在の政治的、経済的機構がこのような条件を自発的に作りだすなどということは、自殺的行為に等しいと悟るだろう。政治的、経済的権力構造は——そういう用語は、西側の資本主義と東側の共産主義の双方にとって実際には同義語であるが——どんなに多くの合理的議論が、人生のあらゆる側面におけるその画一的な支配を除去しようとしても、簡単に自滅などしない。存在している消費のための教化と、教化によって創りだされる人工的な欲求を満足させるための消費という悪循環は、フロムが提案しているほど簡単には破ることができないはずがない。既存の機構の内部で、大規模な社会的変革は、きわめて時間を要し、長たらしいものである。いくつかの西ヨーロッパの国々では、生態系と防衛問題にたいして大衆の意識を変革しようとする試みが、過去一〇年のあいだに具体的な政治変化をもたらした。たとえば、西ドイツでは、「緑」の党が最近かなりの大衆の支持を受けた。だがそれは、社会風潮のなかにあってまだ微妙で暫定的な変化なので、その最終的な成果は、予言することはできない。

結論として、エーリッヒ・フロムは、救世主的な希望の実現にかんしては懐疑的である。企業化された産業の圧倒的な力に直面し、大衆の無力と恐ろしいほどの無関心を見れば、持つ様式を逆転させるにはせいぜい二%の可能性しかなかろう。この確率が、ビジネスの取引になったとすれば、理性のある人

間ならば誰もそれに投資しようとはしないだろうと、フロムは認める。こう述べるとともに、フロムは一九三七年のまだ熟していない論文「無力の感情」の要点に戻る。このなかで、フロムは国家社会主義、党勃興前後のドイツ中産階級に蔓延していた社会的性格を実に正確に描いていた。今や、四〇年を経て、彼は本質的には同じ結論にたっている。すなわち、万能と思えるシステムによって搾取されているほとんどの人びとは、本質的には、独立して考え、行動することが不可能であり——気が進まなく——なる。だが、運命に無条件に身を委ねることは、フロムの性格とは相容れない。本の最後のページでは、ふたたび、自由で生産的である人間が占める新しい社会のヴィジョンが呼びおこされる。フロムはこの高貴な空中樓閣を、中世の神の都と現代の世俗の都との弁証法的統一——すなわち、在ることの都——と呼ぶ。

熱烈な支持者たちさえ、『生きるということ』の出版にはある種の狼狽を覚えた。フロムの鋭い社会分析は、彼が大声で述べている解決と簡単に調和するはずがなかった。比喩的に言えば、この本のほとんどすべての行が、そういうジレンマの解決が明らかに不可能であるという緊張に満ちている。フロムは自分自身の望ましい未来のヴィジョンを、ぎりぎりいっぱいまで——あるいはそれを越えて、拡げているのを知っていたに違いない。ロルフ・デンカーは、フロムに共感的な批評家だが、彼の提案の実現の可能性については、深刻な疑いを表明している。多くの他の批評家たちも、フロムが提案した実際的な解決方法を素朴で非現実的であると非難した。それはまったくその通りだ。だが、同様に問題は、この本の基本的前提である。(いろいろな性格の構えをあつかっている)社会心理学の理論を、倫理主義に結びつけているからだ。その倫理主義は、持つことは「悪く」、在ることは「良い」という公式に要約される。方法論としても、フロムのアプローチには大いに疑問が残る。社会心理学と倫理学は、彼の著作の



的遅滞の結果ではない。それは自由の欠如の帰結である。ライフは、宣伝に支配された世界にあって批判的理性を活性化し、独立を達成することは本当に可能なかどうか尋ねる。するとフロムは、大衆的な教化にもかかわらず、進歩はやまないだろうという彼の希望を表明する。人間の意識の「変化」は、歴史を通じていつもおこっており、いままなお、そうだと考えられる。変化に対応してきた人たちは、その時代を生きぬき、なおかつ未来にたいしてまったく異なった輪郭のヴィジョンを描きえた人びとである。ここでフロムが述べていることは、革命的性格の構えと言ってよからう。そういった構えが、過去において歴史の進歩を促してきたのだ。

現在の持つ様式が支配的な主な原因として、フロムは非常に多くの人間が信念を欠いているからだと言及する。信念が物への妄想にとつかわらねばならない。だが、根源的で敏速な回れ右が、道徳的、倫理的問題よりもっと重要だ。すなわち、それがまさしく、直接人類の保存につながっている。それならば、自己保存のため理性と意志が、人間を変化へ向かわせるよう整えられるべきだ。最終的には、生に根ざさない生は、破壊性の主な原因となる。もし、進路の根源的な変更ができなければ、人間は事実上自滅するだろう。結論として、フロムは『生きるということ』の三年前に出版された、『破壊』のもっとも大事な論旨の一部を繰り返している。

彼の最後の一般向けの本は、その前提を定式化するうえで弱さと単純化のしすぎにもかかわらず、主に、自己自身の生活の方向にもう一步踏み出そうとしており、まだそれができる人びとの心に訴える勸告と見なされなければならない。実際、これは寂しさを感じさせる本だ。前著までの多くの本に見られた新鮮さと凝縮性には欠ける。全部に納得がいくという訳にはいかないが、それは、人間心理と私たちがうえに働く外部の力にたいするフロムの深い洞察に満ちている。幾分突き放した書き方がみられ、そ

れ以上に内容が個人的ではあるが、なんとと言っても、それは、偉大なヒューマニストの最後の重大な発言である。人間性についての厳密に科学的な叙述ではないが、———そのように読まれるなら———それは、まだ広く読まれるに値する。少なくとも、連帯と平和というユートピア思想を完全に捨てさっていない人びとのあいだでは。

- (1) その二・三の例としては、フシタ(二章、注10)のp.125以下を参照された。
- (2) *The Art of Loving*, World Perspectives, vol. 9 (邦訳『愛するということ』(New York: Harper & Row, 1956), その本はゴッデフ・ライム・ブック版(New York: Perennial Library, 1974) から引用しよう。
- (3) 本書の四章と五章、特に八三頁以下および一〇八頁以下を見られた。
- (4) *The Art of Loving* (注9) p.3.
- (5) 同書 p.6.
- (6) 本書の八章、特に二〇二頁以下を参照された。
- (7) *The Art of Loving* (注9) p.26.
- (8) 同書 p.35.
- (9) 同書 p.47.
- (10) 同書 p.28.
- (11) ハウスマン(一章、注2) p.99を参照された。
- (12) *The Art of Loving* (注9) p.53.
- (13) 同書 p.110.
- (14) *Beyond the Chains of Illusion* (一章、注7) p.8.
- (15) 同書 p.10, 傍注私。



- (16) 同書 p. 20.
 (17) 同書 p. 139.
 (18) 同書 p. 198.
 (19) 本書の二章、特に二八頁を参照せよ。
 (20) Boston: Beacon Press, 1955.
 (21) 一章(註四)を参照せよ。
 (22) *The Revolution of Hope. Toward A Humanized Technology, World Perspectives*, vol. 38 (邦訳『希望の革命』(New York: Harper & Row, 1968), p. 9.
 (23) New York: Harcourt, Brace & World, 1966
 (24) New York: Harcourt, Brace & Co., 1954.
 (25) New York: Alfred A Knopf, 1964.
 (26) New York: Harcourt, Brace & Jovanovich, 1966
 (27) New York: McGraw-Hill, 1967.
 (28) *The Revolution of Hope* (註四) p. 96.
 (29) 同書 p. 124.
 (30) *To Have or To Be?* World Perspectives, vol. 30 (邦訳『生かぬべからず』(New York: Harper & Row, 1976), 中の本は『生かぬべからず』の版(New York: Bantam Books, 1981)から引用して示す。
 (31) *Being and Having. An Existentialist Diary* (邦訳『存在と所有——ある実存主義者の日記』(New York: Harper & Row, 1965)
 (32) Zurich: Editio Academica, 1969.

- (33) *To Have or To Be?* (註四) p. xxviii
 (34) *Small is Beautiful. Economics as if People Mattered* (邦訳『スモール イズ ビューティフル——人間の中心の経済学』(New York: Harper & Row, 1973)
 (35) New York: Dover, 1973.
 (36) *To Have or To Be?* (註四) p. 63.
 (37) 同書 p. 99.
 (38) San Francisco: W. H. Freeman, 1970
 (39) *Ende Oder Wende* (Stuttgart: Kohlhammer, 1975).
 (40) *To Have or To Be?* (註四) p. 166.
 (41) 本書の三章、特に五二頁以上を参照せよ。
 (42) "Ein Weg, den man nicht gehen wird," *Frankfurter Allgemeine Zeitung* 23 February 1977.
 (43) 同上(註四) p. 8を参照せよ。
 (44) "Mahnmal in verwusteter Landschaft. Erich Fromm, Psychoanalytiker und Visinar," *Neue Zürcher Zeitung* No. 106, 7/8 May 1977.
 (45) Reinbek: Rowohlt, 1977.
 (46) "Die große Jagd auf das Falsche," *Pardon* 6 (June, 1977) p. 68-70.



第十章 深淵を覗き込んで

人間の攻撃性の理論（一九七三〜一九七五）

晩年になって、フロムは大へん健康を書した。一九七四年、『破壊』の出版の一年後、フロムと妻はメキシコには戻らず、永久にムラルト（カントン州チチノ）にとどまる決心をした。そこで、彼は名誉市民の榮譽をになった。フロムは、ザルツブルグで開かれる人間性にかんするシンポジウムに定期的に出掛け、（インタビューをおして）マス・メディアとの接触をたもち、そしてまた人間主義的な構えの人びとや学者仲間、とくにヒューマニスト・ソシアリズムを標榜している科学者や他の公けの人びとからなる「実験派」とは密接な関係をもった。彼は、「実験派」の定期刊行物である『ブラクシス』の共同編集者としても貢献した。一九七〇年には、フロムは、『精神分析の危機』という題で論文集を編集していたが、それは、一九三〇年代の論文をどちらかといえば不器用に書き換えたものなのだが、精神分析の現状に新たに貢献する重要な論文をふくんでいた。この論文もまた、「精神分析の危機」と題されていたが、今日の観点からもきわめて読むに値する。ここでもフロムはもう一度、現代の分析的傾向が危険であり、しばしば歪められていると挑みかかる。というのは、今日の分析者が、個人を、病める社会の規範や行動様式に適用させようとする傾向があるからだ。別の言葉で言えば、もしある人間が、共通に受け入れられている相互作用の基準によって精神的に病んでいると見なされるならば、むしろ全体

としての社会的性格の方に問題があると言った方が当たっている。——画一化しない人間個人にあるのではない。この洞察力のある文の行間には、同僚の分析者にたいするフロム自身の欲求不満が見られる。とくに彼を排斥し、彼のことをフロイトの「修正主義」だとした仲間にたいしての。

エリッヒ・フロムは残りの生涯を、敬虔な仏教徒として過ごした。毎朝、彼は黙想し、精神の集中に努めた。（彼の師は前述の僧侶、『仏教の黙想の心』の著者であるニアポニカ・マハテラだった。）さらに、フロムは日々の生活の基礎として自己自身の夢や潜在意識の活動の分析を行った。フロムは一九六〇年に出版した『禅と精神分析』のなかで提起した原理を強く抱き続けたと言って間違いないだろう。疑いなく、フロムはきわめて知的な自己訓練と集中を続けた。それは、肉体的に弱くなってきた時にも、いろいろな病気で健康を損ねていた時にも続けられた。

フロムの七五回目の誕生日に際して、ボリス・ルバンプロツァーとライナー・フンクは精神分析の過去、現在、未来についてのシンポジウムを催した。これはゴットリーブ・ダットワイラー協会（チェーリッヒ）の後援のもとにロカールノで開かれた。フロムが、ほとんど四〇年近い診療家としての実際の体験から得られた事実を熟成して、基調講演を行った。この精選された講演の自身は、ルバンプロツァーの手による簡単なレジメによって知ることができる。現代の精神分析にかんする数ある問題のなかで、フロムはおもに人間の正常さを脅かすものとして、次の争いの残る領域を数えあげた。すなわち、(a) 自由の意識と無意識の現象としての自由対意識の組織された操作と行政の独裁性 (b) 良心の意識対無意識の罪の感情 (c) 正直の意識対自分自身および他人にたいする無意識の欺瞞 (d) 個人主義の意識対紋切り型の無意識の存在 (e) 自己同一性の意識対他人にどう見られているかという無意識の関心 (f) 誠実の意識対無意識の誠実の欠如 (g) 愛しているという意識対無意識の無関心、憎しみ、攻撃性

③(1) 能動性の意識対心の受動性 (1) 自分の環境にたいする現実的な関係の意識対無意識の非合理主義

これらすべての個人的なストレスにかんする領域は、個人的、そして社会的性格学についてフロムが書いた作品に容易に関係づけられる。もう一度言うが、彼の目的は、(教化の結果として)人工的につくられた意識と、人間の欲求という現実とのあいだの軋轢を示すことにある。人間の欲求は、あまりにもしばしば、その全てが無意識の中に抑圧されがちである。そして、人が自覚しているような人間性と、現代の文明や社会の制度とのあいだの深い敵対関係に鋭い焦点が当てられている。『生きるということ』に似て、この研究は人間性のこれまでの発達にたいするフロムの暗い見方によって結論されている。フロムは疑いもなく人類——すでに環境破壊と核による崩壊という二重の死の脅威に捕らわれている——が、精神的で、情動的な能力の容赦のない、着実な減少に苦しんでいると見ている。だが彼はまた、このような螺旋的に降下していつて最終的には完全なロボット化に至るような段階は、——まだ遅過ぎないとするれば——信念と理性によってくい止めることが可能であるとも信じている。

『生きるということ』を完成させるために、フロムの健康は過度に害された。一九七七年から七八年にかけて、彼の心臓は繰り返し返す発作のために悪化した。一九七九年にドルトムント市が文化生活にたいし著しく貢献したとして、フロムにネリー・ザックス賞を授与したとき、フロムは健康が悪化して授賞式に出席できなかった。受賞の言葉は彼の欠席のなかで読まれた。それは「我々の時代のヴィジョン」と題され、新しい社会のなかに新しい人間を創造するための、感動的で情熱的な弁論をふくんでいた。最後の——そして、もっとも重要な——文はこうだ。「我々を導いてくれるヴィジョンとは、新しい人間のヴィジョンである。それは情動にあふれた、人間らしい現実のなかに生活する自由な人間であり、服従

や支配されることなしに愛することのできる人間のヴィジョンである」

八〇歳の誕生日を迎える八日前、エーリッヒ・フロムはムラルトで心筋梗塞で死んだ。彼の故郷であり、少年期や青年期の形成にあずかったフランクフルト市は、八〇歳の誕生日にゲート牌を授与して名誉をたたえるはずだった。それはフランクフルト市があたえる最高の栄誉である。それは、以前にはマックス・ホルクハイマーとセオドル・W・アドルノが受賞しただけである。フロムにとって、この栄誉は遅すぎた。夫人が一九八一年の三月に彼の死後それを受けとった。

ヨーロッパ大陸で、一九七〇年代にフロムの評判が上がっていった大きな要因は、彼のもっとも重要な作品である『破壊』(邦訳)⁽⁵⁾の出版だった。この作品は、精神分析理論の三部作の最初の部分にあたると思われる。だが、残りの二部はどうとう完成されなかった。彼の他の著作とは違って、フロムの最大傑作は、一般の 대중には大きな共鳴を勝ちとることはなかった。そのスタイルや用語の選び方は、主に一般的読者を想定したものではなく、むしろ専門的な心理学者や治療家を想定したものだ。にもかかわらず、その本の大部分は、ちょっと中身を読んでみれば、そんなに近づき難くないことがわかる。専門家ではなくてもある程度教養のある読者なら、フロイトやサルヴァンの本に見られるより、かなりなめらかなフロムの言い方をここに見るだろう。次に挙げる分析の一つの意図は、この優れた本をより多くの読者に紹介することである。フロムの思想を真面目に研究しようとする学徒ならだれでも、人間の破壊性の深淵のなかに、フロムを追っていかうとする多少の努力をさけるべきではない。フロムは、ページルではないだろうし、読者はダンテではない。だが、フロムの人間性の底に潜む世界の探究は、確かに、ページルとダンテの神話的な地獄の旅に引けを取らぬほど面白い。

エーリッヒ・フロムは『破壊』に六年以上も取り組んだ。五〇〇ページをこえるこの堂々とした本は、



明らかに彼の性格学に、多くの批評家たちが以前欠けている、あるいは不十分と見ていた科学的基礎を提供しようとする意図したものだ。フロムは彼の作品にたいして行われた過去の非難、とくにその「大衆受け」するようなスタイルと、硬い学術的論証が一般的に不足していることにかんじて、それを論駁するのにかんがりの努力を払っている。序文で、フロムは読者に人間の破壊性の現象を「広い視野」から見ることを約束しており、実際それをやっている。このように問題を追求するためには、フロムは以前には触れたこともない、あるいはせいぜい何かのついでに取り扱っただけの知識を求めて、さまざまな領域に没頭しなければならなかった。本能主義や行動主義の分野を徹底して調べておくだけでなく、医学的、とくに神経心理学的な側面の話題にもかなりの洞察を示している。医学訓練を受けていない学者が、こういった領域の科学的に有効な議論をするには、かなりの努力を要する。全体としてのこの作品にかんじては、人はその百科事典のような領域の広さに深くうたれざるをえないだろう。確かに、この本はある弱さを露呈している。そのひとつは、たびたび見られる深さの不足である。だがそれを言うなら、浅薄であるという傾向は一九三〇年以降のフロムのどの作品にも特徴的であると言えるだろう。そして、もう一方では、その本は三部作の一部を構成するにすぎないのであって、フロムは後のより深い探究のためにいくつかの考えを差し控えていたという弁解も成り立つ。にもかかわらず、この本は大変優れた利点をもっている。以下の分析は、もう一度この本の洞察とその矛盾する側面に絞ってみよう。

第一編では、人間の攻撃性についての一般的な理論にたいするフロムの明快な議論が展開される。新本能主義者たち——すなわち、フロイトやローレンツ——と新行動主義者は、どちらもこの現象を説明するために限られた、部分的には誤った証拠しか示していない。コンラット・ローレンツは、きわめて人気のある本である『進化と人間行動の修正』と『攻撃』の著者だが、あらゆる人間の攻撃性を、系統発

生的な領域、すなわち、人間という種の本能的機構に位置づける。このような理論については、ローレンツは一般的にフロイト派の伝統を受け継いでいる。すなわち、フロイトは早くから本能的資質を二つの範疇に分類していた。性本能あるいは生の本能（エロス）と死の本能である。死の本能は、後に彼の弟子の一部によってタナトスと呼ばれた。この「破壊的」本能は、フロイトによれば、部分的には制御される。だが、人間の生身の体には依然として二つの葛藤する力が併存している。攻撃性は、いつでも有力な役割を担っているので、人間には行動の制御機能が働くと思われる。フロイトのどちらかと言えば基本的な理論にたいして、フロムは、それが経験的な証拠にもとづいていないと正しく批判している。フロムは、フロイトの創始者としての努力は、主に人間心理の構えの類型的側面に集中していたと指摘する。社会的要因は、フロイトのアプローチでは、せいぜい付随的役割しか果たしていなかった。

フロイトに触発され、ローレンツは、動物や人間の攻撃性にたいする彼の「水力学的」考えを提起した。エネルギーは生体の内部で（水力学的な機能をもって）特定の圧力点にまでたかめられる傾向があり、その点を越えると閉じ込められていた攻撃性が爆発する、とローレンツは言う。そこから、攻撃性は生命維持に必要な本能的機能であり、それによって個体と一定の種の生存が確保されるというローレンツの仮説が提供される。フロムに言わせれば、「ローレンツの仮説の論理は、人間はかつて攻撃的だったから攻撃的であり、現在攻撃的だから攻撃的だった」と言うに等しい。ローレンツの周りでおこる本能主義者たちの論争に、フロムは軽蔑を示す。フロムは、ローレンツの論旨が動物の行動の観察にもとづいており、そこからガチョウと魚などと人間の行動とのあいだの類似を導いているという事実、強く反対する。近年見られる幅広いローレンツへの追従は、本当に驚くべきである。フロムが批評していることは付け加えておくべきだろう。ローレンツはたえず強くダーウィンの影響を示している。そして、



一九四〇年に彼は、ナチの民族主義政策を事実上許容するものと解釈されるエッセーを書いてさえている。多くの現代批評家にとって、彼の発見は要領をえなただけでなく、きわめて技巧的であると受けとられている。フロムはローレンツの最近の著作のいくつかに秘められている残虐性の要素を正しく批判している。その残虐性のなかで、軍事的な熱狂や軍人的な愛国主義が、歴史的過程において創造的力として歓迎されているのだと。ここでは本能主義にたいするフロムの批判をこれ以上追う必要はほとんどない。本能主義は、とくに今日のそれは、科学思想にたいするつまらない言い訳である。それは大変しげば、もっとも低い水準の人間行動を卑しく正当化するにすぎない。

本能主義者たちに反対して、環境主義者たち(新しい意味、すなわち、生態的な「環境」保存に心を砕いている人たちと混同されてはならない)と行動主義者たちは、人間の行動/相互関係はまったくあたえられた環境の産物であると主張した。ジョン・ブローダス・ワトソンは、革新的な作品である、『行動——比較心理学入門』の著者だが、この方法の現代的な創始者となったと言つてよからう。ふり返れば、行動主義は、一九世紀の実証主義に根ざしているのである。パーラス・F・スキナーは、今日合衆国でもっともよく知られている新行動主義学派の代表的人物である。彼の著『科学と人間行動』やその後のいくつかの出版物、とくに『ウォールデン・トゥー』(Walden Two)はいまだに多くの大学の学部生に読まれている。新本能主義者と鋭く対照して、行動主義者は、主に人間の相互作用と社会的条件の過程やその結果に興味をもつ。フロムは人間行動は、——その「内的傾向」や一定の本能的構えを考慮に入れないければ——かなりの程度、外的刺激、すなわち「肯定的」、「否定的」という強化によって形造られようというスキナーの考証にたいしては、信頼をおいている。だがフロムは、スキナーが人間行動のより深い動機をあきらかに無視していることを問題にする。さらにフロムは、スキナーの問題のあ

る価値体系を根拠に彼に挑戦する。その価値体系のなかでは、より高貴な目的のために、ある集団が別の集団に搾取され、従属しうることが許容されている。フロムは「新行動主義は、ブルジョワ的な経験の本質に根ざしている。すなわち、あらゆる人間の情熱のうえに第一に利己主義と私利の追求を置いている。……」という結論に達する。

北アメリカにおけるスキナーの人氣は、彼が科学的思想を独占資本主義のイデオロギーと社会・経済的現実とに巧妙に融合させたことによるとフロムは言う。スキナーの人間行動にたいするアプローチは、「新しい科学的な人間主義を着飾った都合主義の心理学」に過ぎない。スキナー主義に反対して大変説得力のある論拠を立てたノーム・チョムスキーを別にすれば、フロムはこのとてつもなく人氣のある理論に潜む危険を指摘できた数少ないアメリカの学者の一人だった。フロムの批判は簡潔で、示唆に富んでいる。行動主義は——少なくとも、スキナーや彼と同類の思想家の手にあるうちは——倫理的相対主義の注入に自ら手を貸しているという観点から議論されてもいいかも知れない。もしある特定のイデオロギーあるいは行動の型が、(スキナーの場合は、アメリカの民主主義という価値体系が)「肯定的」という強化の手段によって条件付けられるものならば、「価値ある」とされる他のどんな規範も条件付けられよう。大変面白いことに、ナチスの支配するドイツにとどまった心理学者と社会学者の多くは、初期の行動主義に由来する方法をとっていた。それは、まさしくこのような科学的方法論がナチ体制にびつたりだったからである。それは、ナチの指導者たちによって心に思い描かれていた「支配者民族」の育成と訓練には理想的に適していた。行動主義的構えの研究は、スターリン時代のソ連でも国家によって支援されていた。そこでは、子どもたちを家族の結合からはなし、行動主義的に制御された環境のなかで躰けるといふ、驚くべき、ある意味ではショックングな実験が行われていた。そういう子供た

ちの養成は、感情的、知的な奇形という結果に終わった。ハックスレーをはじめ多くの作家が、ユートピア小説のなかで行動主義の概念を検証している。科学が容易に交換できる良心の方を受け入れ、人間的な伝統のなかの固い根を捨ててしまえば、それは、いつでも既存の政治的権力構造の共犯者になる危険があると言っている。

この本の第二編は、本能理論が無効であることを示したデータや証拠をとり扱っている。フロムは四つの違った側面から彼の反対者に立ち向かう。神経生理学にかんする短い章では、人間の脳だけが、ある特定の攻撃性を生み出すという彼の理論が表明されている。それは、自己防衛や自己保存の行動のなかに見られる。神経生理学者たちにとってこの章は、別に特別新しい洞察がある訳ではない。同様な退屈さは、フロムの動物行動にかんする叙述のなかにも見られる。動物はしばしば群れをなして攻撃したり、正体不明の恐れを抱いて、攻撃のとりこになったりする。一方人間は、しばしば、宣伝や社会の圧力によって仲間をたいして残酷性を発揮するよう条件づけられている。このことは一般的には、そのいけにえを「敵」としての、顔もない、名もない存在に変えてしまうことによって遂行される。フロムは、ベトナム戦争——「東洋人」にたいする冷血な大虐殺——や、ヒトラーの「劣等民族」の破滅をもくろんだ大弾圧を例として挙げている。フロムは動物と人間は違うのだという、ごく当然のことを言っているにすぎない。動物における攻撃は本能的欲求の帰結である。だが人間は、理性の力を付与されており、個人的な、社会的な性格の構えに動機づけられている。フロムが有名な言を吐いているのはここである。「人間の人間性が、人間をきわめて非人間的にしている」⁽¹²⁾

古生物学の観点から論じて、フロムはオーストラロピテクスは、——人類の先祖の一種——けっして狩猟者ではなかったと主張する。その結果として、「狩猟的」遺伝子の存在が人類から自然的に排除され

うる。最後に、人類学の最近の発見により、より原始的な社会は、高度に進歩した段階の社会よりずっと攻撃的であるという理論には異議を唱えていようだ。

全体的としては、このような学問にかんするフロムの議論は上すべりである。本のこの部分のデータはしばしば不十分であるけれども、フロムは何とかして思考を突のらせようとする。フロムは、破壊性はあらゆる人種として、内的に固有なものでも、典型的なものでもないという疑う余地のない彼の理論を展開はしない。この点を証明するのはおそらく不可能な課題だろう。そのような破壊性は、人間性の一部ではない、という彼の結論は動かしがたい事実としてではなく、いまもって仮説と見られるべきだ。それは、この本の中核を成し、いくつかの攻撃や破壊の型とそのめいめいの原因の探究に当てられている第三編の理論的基礎となっている。

この本の中心部を議論する前に、そのすぐれた構成のなかに、ひとつ大事なものが抜けていることに触れておかねばならない。本能主義と行動主義にかんしては、正しく批判しているが、実のところ、フロムは、自身の考えを予知させるウイリヘルム・ライヒの性格学やそれに類する作品をなんら認認していない。ライヒの『ファシズムの集団心理』と、『性格分析、その技術と基礎』の両者は一九三三年に最初に出版され、フロム自身の成長にはかなりのインパクトをあたえていたのだ。この二つの研究は、『社会研究誌』で、フロム自身の批評のすぐ隣で、カール・ランダウアーによって批評されていた。ライヒの理論は、階層社会における個人の性的歪みに基礎をおいている。能動的な異性愛の衝動は、社会的抑圧によって押しひしがれ、それに続いて指導者、国家あるいは権威主義的な宗教へのマゾヒスティックな（あるいは同性愛的な）依存に転化させられるとライヒは主張する。ライヒは、性的な解放が政治的な自由の鍵になると仮定する。ライヒのどこか狭い等式化をしいてはいるが、フロム自身が人間の



破壊性をナルシシズムやサド・マゾヒズムを基礎に置いて探究しているのは、明らかにライヒの作品に負っている。にもかかわらず、『悪について』にも『破壊』にも、ライヒの名前は触れられてさえない。

『破壊』においては、『悪について』で「持つ」と「在る」を区別したように、攻撃を「良性」のものと「悪性」のものに区別している。この方式はすでに議論済みで、ここで繰り返す必要はあるまい。だが、ここでは、二つの新しい見方が付け加えられている。すなわち、革命と戦争である。革命的な攻撃性は、正確に良性種とみられる。というのは、それは、自由や正義にたいする人間の衝動の究極の表現だからだ。フロムの革命にたいする態度がきわめてアンビバレントであるということは、この本の前の章で見てきた。フロムが革命にたいして明らかに根深い恐怖をいだいていることは、彼の革命的攻撃についての議論を読めばすぐ判る。不正な政治体制にたいする防衛的攻撃は、簡単に激しい破壊性に変わりうるし、以前の力の均衡や抑圧状態に逆戻りしたとすると、フロムは言う。言い換えれば、以前抑圧されていた人びとは、しばしば闘争の果てに新しい抑圧者になると、フロムは、革命を反復的に繰り返しては新たに歴史的抑圧を生む力として、どこか単純化して見ているので、合法的な社会変化の手段としては真面目にそれを考えたがらないのだ。

同様に注目すべきなのは、彼の戦争にたいする発言だ。クインシー・ライト(『戦争の研究』¹⁶)と立場を同じくして、フロムは社会が疎外されればされるほど、より交戦的になるという理論を展開する。堅固な階級構造をもち、さらに、労働の確固とした分割をとまなう社会は、ことにそうである。(『正気な社会』)での疎外についてのフロムの発言を参照のこと。それゆえ戦争は、攻撃の「道具的」形態として見られており、人間に固有な破壊本能によって誘発されるようなものではない。その原因は、社会構造

と社会的性格そのもののなかにあり、同様に、支配的エリートがもっている野望のなかにもある。この点までは、読者はフロムに同意できる。だが、それに続く彼の理論の拡大は、何か突飛でロマン主義的ですらある。戦争は「興奮させ」、退屈や日常を破り、ある程度まで階級の違いさえ抹消すると、フロムは言う。戦争への参加は、「不正、不平等、そして平和時の退屈が支配している社会生活にたいする間接的な反抗……」として認識されるべきだと。これは、公然たる反戦主義者から出たとは思えない奇妙な言葉だ。ここにも、フロムの思考につきものの多くの矛盾の一つが見られ、どのように同情的な説明をもってしても、拭い去ることはできない。

それに続く人間性の二つの本質的力の探究——「生をさらに深める症候群」(『バイオフィリア』)と「生に逆らう症候群」(『ネクロフィリア』)——は、その弁証法的な相互作用とともに、『悪について』以来読者にはもう馴染みである。どちらの性格の構えも、現にある外部、すなわち社会的状態によって、強められもすれば弱められもする。社会的な性格のなかの優勢な要素としての合理性は、バイオフィラスな傾向を高めがちなのにたいして、不合理な社会構造はネクロフィラス的な特性を強化する。破壊性そのものは、ネクロフィリアの原因ではなく、その結果である。これは、この本の中心的な叙述であり、フロムの最初の本である『自由からの逃走』に直接つながる。¹⁷『自由からの逃走』のなかで、フロムは「破壊性は生き活きた生を生きさせていないことの産物である」と述べている。今や三〇年以上も経って、フロムは、何が実際に生き活きとしていない生を形造るのかを調べ始める。

ほとんどの場合、破壊的 성격は、サディズムに根ざしているとフロムは言う。性的でないサディズムは、性的サディズムが相手を傷つけ、支配しようとする以上に危険でもあれば、より広がっているように見える。性的でないサディズムの臨床例として、フロムはジョセフ・スターリンの性格分析を挙げ



る。この分析の重要な結論は、スターリンは彼の腹心の部下が自分に代わって人びとに拷問を加えるのを楽しんだし、個人的レベルでは、犠牲者をなぶりものにすることを好んだということだ。スターリンが同僚にたいして優しい関心を装うときはいつも、彼らの逮捕や刑の執行は差し迫っていた。フロムは、弱さや取るにたらないという基本的な感情が、そのような行動の動機になりうると正しく分析している。サディズムとは、「無能を全能の経験に置き換えることである。それは精神的に不具者の宗教である。」⁽¹⁶⁾そして、無力さ、すなわち、自分の回りと創造的、生産的方法で関係できないことは、生を活かせない生と不可分の関係にある。このことこそ証明されるべきことであつた。この証明は、どんなに回りくどかろうが、実際のところ、フロムの性格学の仕事の総決算である。彼の後期の最大傑作のなかのサディズムの正確な記述は、早期の研究の社会的性格に向けて大きな弧を描いて迎っていくことができ、彼の全作品のゆるぎない継続性を印象的に証明している。

そのようなサディスティックな性格の構えについてのフロムの理論は疑いなく有効性があるけれども、フロムの分析的な方法論にかんしては、若干の限定がつけられなければならない。スターリンの場合は、強い誇大妄想的な性格傾向が、あたえられた記録と他の歴史的報告書から論理的に推理される。欺き、屈辱をあたえ、そして最終的には人を破壊させることによって獲得される喜びのように見えるものは、ある場合は、自分自身が邪悪な敵に囲まれていると思っていた妄想症患者の絶望的なやり方だったのかも知れない。このような見方は、——あきらかにこのソビエトの指導者の臨床的な病理とむすびついているのに——フロムの分析では語られてはおらず、それゆえに、かなり緻密ではあるが、結論に達してはいない。一般的に、古くなった、しばしば状況だけの証拠をもとにして歴史的人物を分析するフロムの方法は、多くの専門家には懐疑的に見られている。エーリッヒ・フロムほど、精神分析者と分析を受

けている人とのあいだでダイナミックに視線を交わすことの重要さを強調した人はいなかったのに。こうした要素を欠いているので、(フロムが引用している典型的な、悪意のある攻撃の例のすべては死んだも同然である。それは、本来、目撃者の報告を通してしか分析されえないものである。) スターリンにかんするフロムの論説は、興味のある歴史の断面は伝えているが、完成された性格学の基礎とはなっていない。

同様な限定は、ハインリッヒ・ヒムラーとアドルフ・ヒットラーにかんするより広範囲な記述にも適用される。第三帝国の突撃隊員の指導者だったヒムラーの性格特性にかんしては、フロムは、この男は強いサド・マゾヒスティックな傾向をもっていたと、きわめて正しく仮定している。サド・マゾヒスティックな構えは(ここでは「官僚主義的性格」と呼ばれている)、しばしば厳格な、服従、階層制度、法、秩序などに向かって方向づけられた社会的構造から生みだされる。フロイトは、この官僚主義的性格を彼の独特の概念である「肛門」期性格と呼んでいた。フロムは、ヒムラーを「肛門・貯蓄サディズム」の臨床例に分類する。このタイプの本質は、現存する権力に服従しようとする心の構えにある。フロムは適切にこれを「副官」と呼んでいる。ヒムラーは、直接、あるいは間接的に世界歴史のなかでもっとも洗練された集団殺害機関の責任者であり、ドイツの恐怖体制とヨーロッパ征服にも一役買った人物だが、おどおとした子供であり、典型的な「ママっ子」だった。一生の後期に、彼はさまざまな恐怖と精神病に襲われた。彼の場合、生を生きていかなかった生は、その分だけ、本当に生きることへの鋭い恐怖になった。ほとんど異常なまで秩序と杓子定規を求めた男、彼は、絶望的に権威とさまざまな父親像に寄り掛かった。徹底してヒットラーに従順に傾倒していたにもかかわらず、すべてが失われたときに、ヒムラーはヒットラーを捨て、しかも自分が戦後のドイツ統治において指導的役割を果たすこと



ができると勘違いしたのは、驚くに当たらない——むしろその性格による。ヒムラーは「まったくの日和見主義者」だった。ぎょっとする事実は、弱さと徹底した無慈悲さとを独特に混ぜ合わせた、こういった性格の構えが、きわめて広範囲に広がっていることである。フロムは確信をもって述べる。「何千というヒムラーがわれわれのまわりに生活している」と。過去と現在の歴史をざっと見ただけでも、従順でまったく情をもたない殺人者のような、官僚主義的性格をいたるところに見つけるのはたやすい。

性的でないサディズムとサド・マゾヒズムは、決定的に悪性の攻撃——フロムの言葉を使えば、ネクロフィリア——に発展するための予備段階としてここでは定義される。繰り返すが、この性格の構えはリヒャルト・フォン・クラフトーエービングクや、現代の研究者であるハルムート・フォン・ヘンティンクによって描かれている性的逸脱とは区別される。ネクロフィリアは、伝統的な言葉の意味では生きて人間の死体にたいする性的関係にかんするものである。フロムの性格学の間では、その言葉は最初に『悪について』で定義されている。それは、物と非有機的なものに取りつかれたように向かい、それとともに生命と建設的な関係を結ばない人間にかんするものだ。フロムはこのような特定の意味でこの言葉を使ったのは、レーニンが最初であると言う。性格に根ざすネクロフィリアについては、スペイン市民戦争からとった、エピソードとして、ミーゲル・デ・ウナムーノの例を、すでに述べている。⁽²⁰⁾ 神経生理学の分野では、フロムはホモ・サピエンスという種の進化をとおして、本能的機能が徐々に減少していることに注目している。脳自体の異常な成長と、とくに新皮質の成長によって、自己覚識とさまざまな性格に根ざした情熱も、人間の行動を決定する手綱を失った。社会的条件が、性格形成の過程に、絶対的ではないにしても、かなりの要因を占めるようになった。人間はまだ、その発展と成長のための完全な可能性を保持している。だが、この可能性を実現するためには、外的条件がバイオフィラ

スな構えに向かって働かねばならない。それなのに、人間の成長に決定的な社会環境のなかにナルシジズム、関係性を持たないこと、そして破壊性などが混在する現状は、成長への衝動を阻害し、ネクロフィリアを生み出しがちである。あるいは、言い方を換えれば、「肛門的性格の悪性の形」を生む。繰り返し、フロムは人間性を説明する力の弁証法的な対立を強調する。

破壊性はバイオフィリアと並立しているものではなく、バイオフィリアに替わるものとしてある。生を受するか、死を受するかは、すべての人間が直面する根本的な選択である。ネクロフィリアはバイオフィリアの発達が阻害されるにつれ大きくなる。人間は生物学的には生を受する能力が授けられているが、心理学的には、受することに替わる解決方法として死を受する可能性がある。⁽²¹⁾

ここから、その本はアドルフ・ヒットラーの性格構造の長い分析に入る。ウインストン・チャーチルとは対照的に、彼とて、ハエを殺したり、テンプルの上にその死骸を並べることによってネクロフィラスな「傾向」を示したのだが、ヒットラーは一方的なネクロフィリアの完全な例と見られる。彼は幼少期や自己形成にあずかった青年期にナルシジステイクな性格特性を補強した。後に、ヒットラーは、受動性——成就できなくて、生産できないこと——と偉大な人物であるという錯覚のあいだを揺れ動いた。彼の性格の基礎は、悪性の破壊の成長に通ずるあらゆる要素をふくんでいた。近親相姦的な固着、冷たさ、他人にたいする関心のまったくの欠如、不合理性、そして、自己の置かれた状態を現実に評価する能力のなさなどである。『悪について』でしたように、フロムはもう一度ネクロフィラスなパーソナリティの人相学的な特徴を定義しようとする。フロムの理論のその部分は、多分ほとんど当てにならない

だろろうということは以前に指摘しておいた。總統のパーソナリティについて矛盾する解釈をなくそうと努力して、演技者と完全な嘘つきとしてのこの指導者の性癖が強く強調されている。これらのことやヒットラーのパーソナリティの別のことに関係のある側面——すなわち、彼の人生を通じて繰り返された合理化しがちな傾向と「反動形成を確立しようとする傾向のことなど」——は、けっしてネクロフィリアであるという決定的な診断を裏づける重要な兆候ではない。フロムの過度に長くて多弁な分析は、あまり関係のない多くの側面とかかわり合いがちである。この点では、フロムは、かれが突然ヒットラーの女性とのかかわりにかんして大変詳細な例を引こうとしたときに、自身のアブローチにどこか不正確さがあると自覚すべきだった。フロムは、ヒットラーの半分血のつながった姪であり、最初の愛人であるゲリ・ラウバルと、彼の長年にわたった情婦であり、一日だけ彼の妻となったエバ・ブラウンも完全に彼に隷属させられていたと言う。ゲリはひどい抑鬱状態に陥って自殺し、エバはすべてが失われたとき、忠誠を誓って自殺した。あたえられた記録にもとづけば、この両者との関係で、二人がともに強いサド・マゾヒスティックな役割を果たしていたことは明らかである。ヒットラーが成熟した愛を経験できなかったか、あるいは、他の人間と、生産的で尊敬しあうような関係さえもてなかったと結論するのはむずかしいことではない。ヒットラーの人生において真正銘の関心を示した唯一の領域は建築学だった。「多分、彼と人生をつないだ一つの橋」だった。歴史上人間の生命にたいするもつとも無慈悲な破壊者が、自分自身を建設者と思いつくとは皮肉である。新しい社会秩序の建設者という意味だけでなく、都市や建物の設計者という意味合いもふくめて。アルバート・スピアは、ベストセラーとなった『ナチス狂気の内幕』の著者であり、彼自身建築家であり、ヒットラーのきわめて近い側近の一人だが、(ちなみに、フロムは偶然彼からさまざまな情報をえている) 建築家になっていたかもしれないヒットラーに

同僚と見なされ、それゆえに特別な待遇を受けた。軍事大臣であったスピアが、總統ヒットラーの発狂した最後の命令のいくつかを取り消したときでさえ、スピアは、多くの者がそうであったように、ヒットラーへの反抗のために生命を失うことはなかった。

まとめてみよう。フロムのアドルフ・ヒットラーの分析は、そのするどい矛先が時としては道を外れることがあるにもかかわらず、印象的な記録である。ある性格学的条件は外部の要因と一致しやすく、事実として、悪性の攻撃症候群を形成するということを結論づけてよい場合がある。だが、ヒットラーのパーソナリティにかんして総合的にそう評価してよいかは問題である。というのは、ヒットラーは、フロムの描写のなかでは、ついには、実際生きたよりも長く生きたような錯覚を与え、ほとんど時を越えた絶対悪の記念碑となっているからだ。はからずも、これは、そのナチの總統にたいする広範な歪んだ認識、すなわち、彼がいわゆる悪魔のような力をもつというほとんど神秘的誇張に一役買っている。ウイリアム・L・シラー、H・R・トレバーローパー、フラン・ブラック、そして、もつと最近ではロバート・ベイラのきわめて冷静な評価に加えて、スピア自身も、この誤った、最終的には危険な神話を一掃するのになら努力している。疑いなく、ヒットラーは雄弁家として、そして煽動家として恐ろしいくらいに素質をもっていた。他方、彼は中途半端な教育を受けた、怒りっぽいブチブルの典型だった。彼は、歴史の一定の時期に、多くの欲求不満で、往々にして無知な人びとを高度に魅惑し、大衆運動に組織できた。ヒムラーにかんして述べたように、一般的な次元で統率者としてのヒットラーの人物像は、ユニークな個性があるわけではなく、実際は簡単に誰かと交代されたり、置き換えられたりする程度のものであった。世界歴史は何世紀にもわたって、悪性の破壊の実例をさまざまな個人の指導者のなかにいやというほど示している。最後の分析において、歴史を形造り、意のままに大破壊を行うのは、

邪悪な個人ではなく、むしろ、彼にそのようなことをなす力をあたえた一定の環境だとされる。

それゆえに、ヒットラーは、絶対悪の権化として受け取られるべきではない。そう受け取られるのは、道徳的範囲が、ヒットラーの独特な性格構造と、彼に力を付与し、それに続く彼の残虐的行為を可能にした社会・歴史的状况との両方をあいまいもことさせているからである。フロムの悪性の破壊性という分析は魅力的だが、それは、一九三〇年代のドイツにおける大きな社会的、経済的条件を十分説明していない。それは、オーストリアを放浪し、芸術家になることを裏切られた人間——生を活かしきれないネクロフィラスの代弁者——が、大国の指導者になることができ、大衆の本質部分に彼自身の破壊の衝動を徐々にしみ込ませていったという特殊な枠組みのなかでのみおきた。興味深い逸話として、ここで、ヒットラーの言い回し（フロムによってはほんの敷衍しか取り扱われていない点）が、彼のネクロフィラスな構えをあらわにしているというところを取り上げてもよからう。ヒットラーの著書『我が闘争』と、とくにあらゆる卑俗な言葉に満ちた彼の後期の演説や会話を取り上げよう。彼がとくに好んだ言葉は、「根絶させる」であり、「根こそぎにする」であり、「一掃する」であり、ドイツ語でそれと同じ意味をもつ類義語だった。破壊の性格の構えにたいする言語心理学的アプローチは、今後さらに研究を深めるためには著しく実りある分野とならう。

『破壊』は「希望のあいまいさ」というエピソードで終わる。フロムはあらゆる歴史的証拠をもつとせず、現在が楽観の時でも悲観の時でもないことを強調する。楽観主義とは、「信念の疎外された形であり、悲観主義は絶望の疎外された形である」とフロムは言う。どちらの態度も、けっして歴史の道筋を変える手段にはなっていない。人間は、心が硬化して、すべてがうまくいっていると公言してはばからない人間を信用しないのと同様、破壊に組みすすどんな政治屋や煽動者たちをも信用しないことを

学ばねばならない。現在の状況にたいする唯一の答えは、人間主義的な思考の広範囲な再活性化である。「批判的で根源的な思考は、それが人間に授けられたもつとも尊い資質——すなわち、生への愛——と混ざり合って初めて実を結ぶだろう。」

この本を論評している人の多くは、個人的な洞察の広さと豊かさを印象づけられた。ほとんどすべての人が、人間の破壊性にたいするフロムの理論は、攻撃の病理にかんして過剰なほど記録には満ちているが——治療のための現実的解決にはならないという点で一致する。きわめて面白いことに、フロムの最大の作品にたいする批評家の反応のなかに一つの観点がまったく述べられていない。すなわち、悪の現象にたいしてフロム自身が魅かれて、いるということだ。そして事実、彼の全作品を調べてみれば、こうした魅了がかなり強く、ほとんど常に底流として流れていることが判る。フロムは、他の本のなかでもスターリンやヒットラーをさまざまに分析していることが裏付けている。それは、ヒットラーの事例に、『破壊』のおよそ六分の一が割かれており、不釣り合いに重さが置かれていることから裏づけられる。この悪にたいする懸かれたような関心は、部分的には、フロムが青年期に強く道徳的、倫理的な問題にひかれたことと、——無神論者になってさえ——決して完全に離れることのなかったユダヤ教という背景によって説明される。集められるかぎりの伝記的な証拠を集めてみれば、フロム自身が、バイオフィラスな性格の構えをもっていたことは疑いがなく、では、なぜ、フロムはそんなに過度に悪の権化に魅かれたのだろうか？ 彼自身のダイナミックな性格学がこの傾向を説明する助けとならう。すなわち、一つの要素（成長症候群）はいつも他の要素（衰退症候群）に弁証法的に対立した位置にある。そしてさらに、フロム自身が悪性の攻撃のとりこにならなかったとしても、この症候にいつひきいられるかも知れないという可能性は、明らかに彼の著作のなかにたえず、そしてさらに深い究明をうな

- (3) In: *Deutsches Arzteblatt* No 41, 9 october 1980.
- (4) "Die Vision unserer Zeit," in *Erich Fromm. Kulturpreis der Stadt Dortmund Nelly-Sachs-Preis 1979*, Mitteilungen aus dem Literaturarchiv bei der Stadt- und Landesbibliothek Dortmund, vol. 7 (Dortmund. Stadt- und Landesbibliothek, 1979), pp. 29f., 訳の要説。
- (5) *The Anatomy of Human Destructiveness* (邦訳『破壊』) (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1973)
- (6) Chicago: University of Chicago Press, 1965.
- (7) New York: Harcourt, Brace & Jovanovich, 1966.
- (8) *The Anatomy of Human Destructiveness* (註の) p. 19
- (9) New York: H. Holt, 1914.
- (10) New York: Macmillan, 1953
- (11) *The Anatomy of Human Destructiveness* (註の) p. 41.
- (12) 同書 p. 125.
- (13) 四章(註10)を参照せよ。
- (14) Vienna: Selbstverlag, 1933.
- (15) *Zeitschrift für Sozialforschung* 3 (1934): 106f.
- (16) Chicago: Chicago University Press, 2nd edition, 1965.
- (17) *Escape from Freedom* (日譯'註の) p 184.
- (18) *The Anatomy of Human Destructiveness* (註の) p. 290.
- (19) 同書 p. 323.
- (20) *Psychopathia Sexualis* (邦訳『性變態と性心理』) (Stuttgart: J. B. Metzler, 1886).
- (21) *Der nekrotische Mensch* (Stuttgart: F. Enke, 1964).

- (22) 本書の二六四頁以上を参照せよ。
- (23) *The Anatomy of Human Destructiveness* (註の) p. 336.
- (24) 本書二六七頁を参照せよ。
- (25) New York: Macmillan, 1970. (邦訳『ナチス狂気の内幕』)
- (26) *The Rise and Fall of the Third Reich* (邦訳『第三帝国の興亡』) (New York: Simon & Schuster, 1960).
- (27) *The Last Days of Hitler* (邦訳『ヒトラー最後の日』) (New York: Macmillan, 1947)
- (28) *Hitler. A Study in Tyranny* (New York: Harper & Row, 1962)
- (29) *The Life and Death of Adolf Hitler* (New York: Popular Library, 1973)
- (30) *R. A. L. ...* (Boston: Houghton Mifflin, 1943). (邦訳『我が闘争』)
- (31) *The Anatomy of Human Destructiveness* (註の) p. 438
- (32) 四章(註34)を参照せよ。



訳者あとがき

本書は 'Gerhard P. Knapp, *The Art of Living - Erich Fromm's Life and Works* (1989) の全訳である。訳文が完成した折に、著者から「日本語版に寄せて」のはしがきをもらった。

エーリッヒ・フロムは、一九八〇年三月一七日、スイスのロカルノの近くのムラルトという村で七九歳の生涯を閉じた。この死から十数年後に、生前のフロムがあれ程強く希っていた冷戦構造——その延長線上に人類の破滅をみていた——が崩壊し、さらにフロムがつとに批判していた一党官僚支配の社会主義システムの多くが雪崩のようにわれわれの前から姿を消していった。もしフロムが現在も生きつづけていたら、この事実を手放しに喜ぶだろうか。私にはそう思えない。なぜならば、フロムがもっとも強く批判の対象としていた資本主義システムによる人間疎外はますます蔓延しており、さらにフロムがその実現を願ったヒューマニスト・ソーシャリズム（顔の見える社会主義）は、なおこの地球上には姿を見せていないからだ。

フロムは、人類の偉大な知的遺産を取り入れ、また、今世紀の人類の悲惨な社会的現実を直視しながら、人類の在るべき姿を描きつつ、あの世に旅立った。生前からフロムの著作は、大きな拍手で迎えられたり、また厳しい批判にもさらされた。フロムの思想がユートピアであり、その論理に矛盾があると、いう批判は多い。

だが、フロムがフロイトから受け継いだ人間個人の心理構造という認識と、マルクス・エンゲルスが



ら受け入れた社会の歴史構造の認識という二つの認識方法を結合し、歴史的存在としての人間の社会的実存性を解明したことは、今世紀の偉大な思想家の一人として、後世にその名を残すことはまちがいないだろう。

本書は、著者の「はしがき」にもあるように、フロムの全業績にたいする英語で書かれた初めて、大がかりな批判的評価として、今世紀もっとも影響力のあった思想家フロムの遺産をめぐる論争に読者が参加することを求めて書かれたものである。はたして本書が、フロムについての大きかりな批判的評価となっているかは、訳者としてはあえて触れなくておく。それは、読者の判断にゆだねた方が良いからである。

それはさておき、本書はフロムの思想形成にかかわった成育歴、社会環境、そしてフランクフルトにおける研究時代の交友関係、さらにアメリカに移ってからのフロムの著作および政治的な活動を克明に追っている。そのうえで、フロムがもっとも影響をあたえたと言われている「社会的性格」の概念を中心に、フロムが解明した人間の創造的側面——バイオジェニクス生命愛と否定的側面——ネグティブ・ラブ死体愛の弁証法的な論理構造を明らかにしている。

フロムはフランクフルトで生まれ、ハイデルベルク、ベルリンで学業を終えた後、フランクフルトの社会研究所で彼の思想の基礎を作り、それまでの研究の総合として『自由からの退歩』(邦訳)を出版する。ついでフロムは、フロイトの批判的修正、倫理学と宗教の研究、彼独自の夢理論の構築、そしてアメリカに移って初期マルクスの研究とその紹介、最後に性格学の体系として『悪について』(邦訳)をまとめ、彼の政治思想家として在るべき姿としての『正気の社会』を公表する。最後にフロムは、彼の全生涯の業績を体係づける三部作の大作を構想するが、それは最初の第一部『破壊』(邦訳)で終ってしま

う。その間、フロムはすべての識字社会で翻訳され、数百万という一般の読者に迎えられた「愛するということ」(邦訳)および『生きるということ』(邦訳)を出版して、二〇世紀後半における人間の存在様式について説教者としての役割も演じている。

著者は「異議申し立てこそ、フロムの生涯を貫くエネルギーであり、顔の見える社会主義こそ彼の信条だった」と書いている。そしてフロムが抱きつづけたヒューマニズムとソーシャリズムという二つの根本理念が、実は二〇世紀の資本主義システムと社会主義システムの両者のもので、もっとも深く誤解され、歪曲された理念であり、その正しい把握こそフロムの課題だったと論じている。ヒューマニスト・ソーシャリズムの潜在可能性が実現すれば、今では死語となった「西側」と「東側」との対立は解消し、新しい地平のうえでさまざまな疎外を克服する方向づけをもった人間社会が展望されるだろうと言るのがフロムの抱いたイメージだったろう。

周知のように、フロムの主要な著作は、我が国では、すべて訳出され出版されている。それは十数冊におよび、そのなかには何十万部も読まれたものもある。本書を訳出するにあたり、訳者は、それらの翻訳を参照した。しかし著者がフロムから引用し、日本語訳があるばあいも、訳書その部分をそのまま引用することはしなかった。著者の文脈にしたがって、原文から直接訳した。ここに、多くのフロム翻訳者に謝辞を述べたい。

翻訳に際しては、はじめに木下一哉が全文を訳出し、滝沢正樹が検討して筆を加え、さらに両者で推敲を重ねるといふかたちを採った。数多く登場する人物名については、人名辞典、心理学辞典、社会学辞典、精神分析用語辞典などに当たったが、登場人物がドイツからアメリカに移住した際にその人名の読み方に変化があったばあいをふくめて、正しい読み方になってないものがあると思う。もともと



- Wiegand, Ronald. "Psychoanalyse und Gesellschaft bei Erich Fromm"
Psychologische Menschenkenntnis 6 (1970): 257-273.
— "Zum Problem des Sozialcharakters." In: A. Reif, *Erich Fromm*, pp.
280-298.

完全な翻訳というものはありえないと考えているが、数多くの誤訳をふくんでいるにちがいない。識者の叱正にまちたい。翻訳作業中、訳者の一人滝沢が、術後院内感染という事故に会い、訳出が一年以上遅れた。それを暖く見守ってくれた新評論社長二瓶一郎氏に、心から感謝を申し上げる。

一九九四年一月

滝沢正樹



- Berlin: Colloquium, 1982
- Landis, Bernhard and Tauber, Edward S. *In the Name of Life. Essays in Honor of Erich Fromm*. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1971.
- Reif, Adelbert, ed. *Erich Fromm. Materialien zu seinem Werk*. Vienna: Europaverlag, 1978.
- Tauscher, Petra. *Nekrophilie und Faschismus Erich Fromms Beitrag zur soziobiographischen Deutung Adolf Hitlers und weitere sozialpsychologische Interpretationen*. Frankfurt: Haag+Herchen, 1985
- Torres, Mauro. *El Irracionalismo en Erich Fromm. La posición científica del psicoanálisis*. Monografías Psicoanalíticas, vol. 6. Mexico City: Editorial Pax-Mecico, 1960.
- Schaar, John H. *Escape from Authority. The Perspectives of Erich Fromm*. New York: Basic Books, 1961.
- Werder, Lutz von, ed. *Der unbekannte Fromm. Biographische Studien*. Frankfurt: Haag+Herchen, 1987.

3 精選した記事やエッセー

- Anshen, Ruth Nanda. "Authority and Power: Erich Fromm and Herbert Marcuse." *Journal of Social Philosophy* 5 (Sept., 1974): 1-8.
- Appel, Werner. "Erich Fromms Dialog mit dem Buddhismus." In: L. v. Werder. *Der unbekannte Fromm*, pp 71-91.
- Balmer, Hans Peter. "Befreiung von der Destruktivität? Erich Fromm in der Debatte und die menschliche Aggression." In: A. Reif. *Erich Fromm*, pp. 109-124.
- Banks, Robert. "A Neo-Freudian Critique of Religion: Erich Fromm on Judeo-Christian Tradition." *Religion* 5 (1975): 117-135.
- Caparrós Benedicto, Antonio. "El carácter social según Erich Fromm" *Convivium* 42 (1974): 3-27.
- Eißch-Kreuzer, Uschi. "Die Theorie des Sozialcharakters in den Arbeiten von Erich Fromm." In: A. Reif *Erich Fromm*, pp 299-326 (also in: *Zeitschrift für psychosomatische Medizin* 18 [1972]: 171-191).
- Forsyth, James J. and Beniskos, J. M. "Biblical Faith and Erich Fromm's

- Theory of Personality*" *Revue de l' Université d' Ottawa* 40 (1970): 69-91
- Friedenburg, Edgar Z. "Neo-Freudianism and Erich Fromm." *Commentary. A Jewish Review* 34 (1962): 305-313.
- Green, Arnold W. "Sociological Analysis of Horney and Fromm" *American Journal of Sociology* 51 (1945/46): 533-540.
- Heigl, Franz. "Die humanistische Psychoanalyse Erich Fromms." *Zeitschrift für psychosomatische Medizin* 7 (1961). 77-84; 153-161; 235-249.
- Heller, Agnes "Aufklärung und Radikalismus. Kritik der psychologischen Anthropologie Erich Fromms." In: A. Reif, *Erich Fromm*, pp. 162-213.
- Heydebrand, Wolf and Burris, Beverly. "The Limits of Praxis in Critical Theory" In: Marcus/Tar, *Foundations of the Frankfurt School of Social Research*, pp. 401-417.
- Jungk, Robert. "Ein Gespräch mit Erich Fromm." *Bild der Wissenschaft* 11 (October, 1974): 59-62.
- Landis, Bernhard. "Erich Fromms Theorie der Biophilie-Nekrophilie. Ihre Auswirkungen auf die psychoanalytische Praxis." In: A. Reif, *Erich Fromm*, pp. 88-108.
- Luban-Plozza, Boris and Biancoli, Romano "Erich Fromms therapeutische Annäherung an die Kunst der Psychotherapie." In: L. v. Werder, *Der unbekannte Fromm*, pp. 101-146.
- Mosse, Hilde L. "Bypaths on the Road to Vienna" *Psychiatry* 22 (1959): 39f.
- Reif, Adelbert "Vom Haben zum Sein. Aufzeichnungen nach einem Gespräch mit Erich Fromm." In: A. Reif, *Erich Fromm*, pp. 219-247.
- Rickert, John. "Erich Fromms Institut in Mexiko." In: L. v. Werder, *Der unbekannte Fromm*, pp. 46-54.
- Schneider-Flume, Gunda "Leben dürfen oder leben müssen. Die Bedeutung der humanistischen Psychoanalyse Erich Fromms für die theologische Anthropologie." In: A. Reif, *Erich Fromm*, pp. 135-161.
- Werder, Lutz von. "Erich Fromms produktiver Charakter" In: L. v. Werder, *Der unbekannte Fromm*, pp 4-31.



- Staehelin, Balthasar. *Haben und Sein*. Zurich: Editio Academica, 1969
- Sturmer, Max. *The Ego and His Own The Case of the Individual Against Authority*. New York: Dover, 1973. (邦訳、『唯一者とその所有』(片岡啓治訳、現代思潮社))
- Sullivan, Harry Stack *Conceptions of Modern Psychiatry*. William Alanson White Memorial Lectures, vol. 1. Washington: William Alanson White Institute, 1948.
- Suzuki, Daisetz Taitaro. *Living by Zen*. London: Rider, 1950.
— *Manual of Zen Buddhism*. London: Rider, 1950.
— *Studies in Zen* London: Rider, 1955.
- Tannenbaum, Frank. *A Philosophy of Labor*. New York: Alfred A. Knopf, 1952
- Tar, Zoltán. *The Frankfurt School. The Critical Theories of Max Horkheimer and Theodor W. Adorno* New York: Wiley, 1977.
- Tawney, Richard Henry. *Religion and the Rise of Capitalism*. New York: Harcourt, Brace & Co., 1926. (邦訳、『宗教と資本主義の興隆』(出口勇蔵、越智武巨訳、岩波書店))
— *The Acquisitive Society* New York: Harcourt, Brace & Co., 1920. (邦訳、『獲得社会』(山下重一訳、『世界思想教養全集第17』(桑原武夫等編、河出書房新社)に収録)
- Tillich, Paul. *Protestantische Vision*. Stuttgart: Ringverlag, 1952.
- Trevor-Roper, H. R. *The Last Days of Hitler*. New York: Macmillan, 1947. (邦訳、『ヒトラー最後の日』(橋本福夫訳、『世界ノンフィクション全集13』(中野好夫他編、筑摩書房)に収録)
- Walter, Otto F. *Die Verwilderung*. Reibek: Rowohlt, 1977.
- Watson, John Broadus. *Behavior An Introduction to Comparative Psychology* New York: H Holt, 1914
- Weber, Max. *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism* New York: Charles Scriber's Sons, 1930. (邦訳、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(梶山力、大塚久雄訳、岩波書店))
- Wertheimer, Max. *Productive Thinking*. New York: Harper & Bros., 1945. (邦訳、『生産的思考』矢田部達郎訳、岩波書店))

Wright, Quincy. *A Study of War*. Chicago: Chicago University Press, Second edition 1965.

Ⅲ 精選したフロムにかんする批評書

1 文献目録

二つの主要な印刷情報が(Ⅲ、2)で紹介するライナー・フランクの本の中にある。すなわち、*The Courage to be Human*, pp. 374-407と、原書であるドイツ語版の *Mut zum Menschen*, pp. 361-412のなかである。

さらに進んだ情報を求めるには、「国際エーリッヒ・フロム協会」(International Erich Fromm Society)のニューズレターを見られたい。そのためには Internationale Erich-Fromm-Gesellschaft に手紙を書けばよい。宛て先は Rappenberghalde 17, D-7400 T7bingen 1, Federal Republic of Germany. である。

2 研究書および選集

- Evans, Richard I. *Dialogue with Erich Fromm Dialogues with Notable Contributors to Personality Theory*, vol 2 New York: Harper & Row, 1966. (邦訳、『フロムとの対話』(牧康夫訳、みすず書房))
- Funk, Rainer *Erich Fromm. The Courage to be Human*. New York: Continuum, 1982 In German original: *Mut zum Menschen Erich Fromms Denken und Werk, seine humanistische Religion und Ethik*. Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1978
- *Erich Fromm. rowohlts monographien 322*. Reinbek: Rowohlt, 1983
- Glen, J. Stanley *Erich Fromm - A Protestant Critique*. Philadelphia: Westminster Press, 1965.
- Hammond, Guyton B. *Man in Estrangement A Comparison of the Thought of Paul Tillich and Erich Fromm*. Nashville, Tenn.: Vanderbilt University Press, 1965.
- Hausdorff, Don. *Erich Fromm*. Twayne's United State Authors Series, vol. 203 New York: Twayne, 1972.
- Knapp, Gerhard P. *Erich Fromm. Kopfe des 20. Jahrhunderts*, vol. 97.

- McGraw-Hill, 1936. (邦訳、『政治一動態分析』(久保田きぬ子訳、岩波書店))
- Lederer, William J. *A Nation of Sheep*. New York: W. W. Norton, 1961. (邦訳、『羊のようなアメリカ人』(国弘正雄訳、弘文堂))
- Lorenz, Konrad *On Aggression*. New York: Harcourt, Brace & Jovanovich, 1966. (邦訳、『攻撃』(日高敏隆、久保和彦訳、みすず書房))
- *Evolution and Modification of Behavior*. Chicago: University of Chicago Press, 1965. (邦訳、『行動は進化するか』(日高敏隆、羽田節子訳、講談社))
- Mannheim, Karl. *Ideology and Utopia*. New York: Harcourt, Brace & Co., 1936.
- Marcel, Gabriel. *Being and Having. An Existentialist Diary*. New York: Harper & Row, 1965. (邦訳、『存在と所有』渡辺秀、広瀬京一郎訳、理想社))
- Marcuse, Judith and Tar, Zoltan, eds. *Foundation of the Frankfurt School of Social Research*. New Brunswick: Transaction, 1984.
- Marcuse, Herbert. *Eros and Civilization*. Boston: Beacon Press, 1955. (邦訳、『エロスの文明』(南博訳、紀伊国屋書店))
- *One Dimensional Man. The Ideology of Industrial Society*. Boston: Beacon Press, 1964. (邦訳、『一次元的人間』(生松敬三、三沢謙一訳、河出書房新社))
- "A Reply to Erich Fromm." *Dissent* 3 (Winter, 1956): 79-81.
- "The Social Implications of Freudian' Revisionism'" *Dissent* 2 (Summer, 1955): 221-240
- Mayo, Elton. *The Human Problems of an Industrial Civilization*. New York: The Macmillan Co., 1933.
- Morris, Desmond. *The Naked Ape*. New York: McGraw-Hill, 1967. (邦訳、『裸のサル』(日高敏隆訳、河出書房新社))
- Mumford, Lewis *In the Name of Sanity*. New York: Harcourt, Brace & Co., 1954.
- *The Myth of the Machine*. New York: Harcourt, Brace & World, 1966.

- Osgood, Charles E. "A Case for Gradual Unilateral Disarmament." *Bulletin of Atomic Scientists* 16, No.4, pp. 127ff.
- "Suggestions for Winning the Real War with Communism." *Conflict Resolution* 3 (4 December 1959) 131ff.
- Payne, Robert. *The Life and Death of Adolf Hitler*. New York: Popular Library, 1973.
- Petrowitsch, Nikolaus. *Abnorme Persönlichkeiten*. Basel: S. Karger, third edition 1966.
- Reich, Wilhelm. *Charakteranalyse. Technik und Grundlagen* Vienna: Selbstverlag, 1933. (邦訳、『性格分析—その技法と理論』(小比木啓吾訳、岩崎学術出版社))
- *Massenpsychologie des Faschismus. Zur Sexualökonomie der politischen Reaktion und zur proletarischen Sexualpolitik*. Copenhagen: Verlag für Sexualpolitik, 1933. (邦訳、『ファシズムの大衆心理』(平田武晴訳、せりか書房))
- Rogers, Carl A. *Casebook of Non-Directive Counseling*. Boston: Houghton Mifflin, 1947.
- Rubins, Jack L. *Karen Horney—Gentle Rebel of Psychoanalysis*. New York: The Dial Press, 1978.
- Sholem, Gershom. *Walter Benjamin—die Geschichte einer Freundschaft*. Frankfurt: Suhrkamp, 1975.
- Schumacher, E. F. *Small is beautiful. Economics as if People Mattered*. New York: Harper & Row, 1973. (邦訳、『スモール・イズ・ビューティフル—人間中心の経済学』(小島慶三、酒井憲訳、講談社学術文庫))
- Schweitzer, Albert. *Philosophy of Civilization* New York: The Macmillan Co., 1949.
- Shirer, William L. *The Rise and Fall of the Third Reich*. New York: Simon & Schuster, 1960. (邦訳、『第三帝国の興亡』井上勇訳、東京創元社))
- Skinner, Burrhus F. *Science and Human Behavior* New York: Macmillan, 1953.
- Speer, Albert *Inside the Third Reich*. New York: Macmillan, 1970. (邦訳、『ナチス狂気の内幕』品田豊治訳、読売新聞社))



訳、紀伊国屋書店))

ii. 関連作品

- Adorno, Theodor W., Frenkel-Brunswick, Else; Lewinson, Daniel J.; and Sanford, R. Nevitt. *The Authoritarian Personality* New York: Harper & Bros., 1950.
- Adorno, Theodor W. *Negative Dialektik*. Frankfurt: Suhrkamp, 1966. (In English Translation: *Negative Dialectics*. New York: Seabury, 1973.)
- Borkenau, Franz *Der Übergang vom feudalen zum bürgerlichen Weltbild* Paris: Félix Alcan, 1934. (邦訳、『封建的世界像から近代的世界像へ』(水田洋他訳みすず書房))
- Bullock, Alan. *Hitler: A Study in Tyranny* New York: Harper & Row, 1962
- Cole, George Douglas Howard and Mellor, W *The Meaning of Industrial Freedom*. London: G Allen & Unwin, 1918.
- Ehrlich, Paul R. and Ehrlich, Anne H. *Population, Resources, Environment: Essays in Human Ecology* San Francisco W. H. Freeman, 1970. (邦訳、『ヒューマン・エコロジーの世界—人口と資源と環境と』(合田周平訳、講談社))
- Ellul, Jacques, *The Technological Society* New York: Alfred A. Knopf, 1964. (邦訳、『技術社会』(島尾永康、竹岡敬温訳、すず書房))
- Eppler, Erhard. *Ende oder Wende*. Stuttgart: Kohlhammer, 1975
- Ferrarotti, Franco "The Struggle of Reason against Total Bureaucratization" In: Marcus/Tar. *Foundations of the Frankfurt School of Social Research*, pp 235-252.
- Freud, Sigmund. *New Introductory Lectures on Psycho-Analysis*. New York: W, W, Norton, 1933. (邦訳、『続精神分析入門』(古沢平作訳、日本教文社))
- Gilder, George *Wealth and Poverty* New York: Bantam Books, 1981. (邦訳、『富と貧困—サプライサイドの経済学』(斉藤精一郎訳、日本放送出版協会))

- Hentig, Hartmut von. *Der nekrotische Mensch*. Stuttgart: F. Enke, 1964.
- Horkheimer, Max "Geschichte und Psychologie." *Zeitschrift für Sozialforschung* 1 (1932): 125-144.
- Horney, Karen. *The Neurotic Personality of Our Time*. New York W. W Norton, 1937. (邦訳、『現代の神経症の人格』(我妻洋訳、誠信書房))
- *New Ways in Psychoanalysis*. New York: W. W. Norton, 1939 (邦訳、『精神分析の新しい道』(安田一郎訳、誠信書房))
- *Our inner Conflicts. A Constructive Theory of Neurosis*. New York: W. W. Norton, 1945. (邦訳、『心の葛藤』我妻洋、佐々木廣訳、誠信書房))
- Jaspers, Karl. *Allgemeine Psychopathologie* Berlin: Springer Verlag, 6th edition 1953.
- Jay, Martin *The Dialectical Imagination. A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*. Boston: Little, Brown & Co., 1973. (邦訳、『弁証法的想像力—フランクフルト学派と社会研究所の歴史』(荒川幾男訳、みすず書房))
- Jones, Ernest *The Life and Work of Sigmund Freud*. 3vols. New York: Basic Books, 1955. (邦訳、『フロイトの生涯』竹友安彦、藤井治彦訳、紀伊国屋書店))
- Jung, C. G. *Psychology and Religion* New Haven: Yale University Press, 1938. (邦訳、『人間心理と宗教』(室川祥枝訳、日本教文社))
- Karn, Herman *On Thermonuclear War*. Princeton: Princeton University Press, 1960
- Kardiner, Abram. *The Individual and His Society. The Psychoanalysis of Primitive Social Organization*. New York: Columbia University Press, 1939
- Kennan, George F. *The Atom and the West*. New York: Harper & Bros., 1957
- Kissinger, Henry A. *The Necessity for Choice*. New York: Harper & Bros., 1961.
- Krafft-Ebing, Richard von. *Psychopathia sexualis*. Stuttgart J. B. Metzler, 1886. (邦訳、『変態性欲心理』(黒沢良臣訳、大日本文明協会))
- Lasswell, Harold D. *Politics. Who Gets What, When, How*. New York:



May Man Prevail? An Inquiry into the Facts and Fictions of Foreign Policy. Garden City, N. Y.: Doubleday & Co., 1961.

Beyond the Chains of Illusion. My Encounter with Marx and Freud. The Credo Series. New York: Pocket Books, 1962 (邦訳、『疑惑と行動』(阪本健二、志貴春彦訳、東京創元社))

— and Maccoby, Michael. "A Debate on the Question of Civil Defense." *Commentary. A Jewish Review* 33 (1962): 11-23.

The Dogma of Christ and Other Essays on Religion, Psychology, and Culture. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1963. (邦訳、『革命的人間』(谷口隆之助訳、東京創元社))

"War Within Man: A Psychological Inquiry into the Roots of Destructiveness." In: *War Within Man: A Psychological Inquiry into the Roots of Destructiveness. A Study and Commentary.* Comments by J Frank and others. Philadelphia: American Friend's Service Committee, 1963.

"The Psychological Aspects of the Guaranteed Income." In Theobald, Robert, ed. *The Guaranteed Income, Next Step in Economic Evolution?* New York: Doubleday & Co., 1966, pp. 174-184; see also *On Disobedience and Other Essays*, pp. 91-101. (邦訳、『保証収入の心理的側面』、『反抗と自由』(佐野哲郎訳、紀伊国屋書店)に収録。)

You Shall be as God. A Radical Interpretation of the Old Testament and its Tradition. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1966. (邦訳、『ユダヤ教の人間観』(飯坂良明訳、河出書房新社))

"Marx's Contribution to the Knowledge of Man" *Social Science Information* 7 (3/1968): 7-17; see also *The Crisis of Psychoanalysis*, pp. 62-76. (邦訳、『人間知に対するマルクスの貢献』、『精神分析の危機』(岡部慶三訳、東京創元社)に収録。)

The Revolution of Hope. Toward a Humanized Technology. World Perspectives, vol. 38. New York: Harper & Row, 1968. (邦訳、『希望の革命』(作田啓一、佐野哲郎訳、紀伊国屋書店))

The Crisis of Psychoanalysis. Essays on Freud, Marx, and Social Psychology. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1970. (邦訳、『精神分析の危機』(岡部慶三訳、東京創元社))

— and Maccoby, Michael. *Social Character in a Mexican Village. A Sociopsychanalytic Study.* Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1970

The Heart of Man. Its Genius for Good and Evil. Religious Perspectives, vol. 12. New York: Harper & Row, 1964; quoted here from the paperback edition: New York: Perennial Library, 1971. (邦訳、『悪について』(鈴木重吉訳、紀伊国屋書店))

The Anatomy of Human Destructiveness. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1973. (邦訳、『破壊』(作田啓一、佐野哲郎訳、紀伊国屋書店))

Aggression und Charakter. Ein Gespräch mit Adelbalt Reif. Zurich: Die Arche, 1975.

"Remarks on the Policy of Détente." In: *Détente. Hearings before the Committee on Foreign Relations, United States Senate, 93rd Congress, Second Session, On United States Relations with Communist Countries.* Washington: U. S. Government Printing Office, 1975.

To Have or To Be? World Perspectives, vol. 30. New York: Harper & Row, 1976; quoted here from the paperback edition: New York: Bantam Books, 1981. (邦訳、『生きるということ』(佐野哲郎訳、紀伊国屋書店))

"Die Vision unserer Zeit." In: *Erich Fromm. Kulturpreis der Stadt Dortmund. Nelly-Sachs-Preis 1979.* Mitteilungen aus dem Landesarchiv der Stadt- und Landesbibliothek Dortmund, vol. 7. Dortmund: Stadt- und Landesbibliothek, 1979.

Greatness and Limitations of Freud's Thought. New York: Harper & Row, 1980 (邦訳、『フロイトを越えて』(佐野哲郎訳、紀伊国屋書店))

On Disobedience and Other Essays. New York: Seabury Press, 1981. (邦訳、『反抗と自由』(佐野哲郎訳、紀伊国屋書店))

For the Love of Life. Hans Jurgen Schultz, ed. New York: The Free Press, 1986 [contains the following essays: "Affluence and Ennui in Our Society," "On the Origins of Aggression," "Dreams are the Universal Language of Man," "Psychology for Nonpsychologists," "In the Name of Life: A Portrait Through Dialogue," "Hitler-Who was He and What Constituted Resistance Against Him?," "The Relevance of the Prophets for Us Today," "Who is Man?"]. (邦訳、『人生と愛』(佐野哲郎、佐野五郎



- "Die gesellschaftliche Bedingtheit der psychoanalytischen Theorie" *Zeitschrift für Sozialforschung* 4 (1935): 365-397 (邦訳「精神分析療法の社会的制約性」、『権威と家族』(安田一郎訳、青土社)に収録。)
- Arbeiter und Angestellte am Vorabend des Dritten Reiches. Eine sozialpsychologische Untersuchung*, ed. and transl. by Wolfgang Bonss. Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1980 (cf. also the English edition: *The Working Class in Weimar Germany A Psychological and Sociological Study*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1984) (邦訳、『ワイマールからヒトラーへ—第2次大戦前のドイツの労働者とホワイト・カラー』(佐野哲郎、佐野五郎訳、紀伊国屋書店))
- "Sozialpsychologischer Teil." In: Max Horkheimer, ed. *Studien über Autorität und Familie*. Forschungsberichte aus dem Institut für Sozialforschung, I. Abteilung: Theoretische Entwürfe über Autorität und Familie. Paris: Félix Alcan, 1936, pp. 77-135.
- "Zum Gefühl der Ohnmacht" *Zeitschrift für Sozialforschung* 6 (1937): 95-118. (邦訳「無力の感情」、『権威と家族』(安田一郎訳、青土社)に収録。)
- "Selfishness and Self-Love." *Psychiatry* 2 (1939): 507-523.
- Escape from Freedom*. New York: Farrar & Rinehart, 1941 (邦訳、『自由からの逃走』、(日高六郎訳、東京創元社))
- "Faith as a Character Trait" *Psychiatry* 5 (1942). 307-319.
- "Should we Hate Hitler?" *Journal of Home Economics* 34 (April, 1942): 220-223
- "Individual and Social Origins of Neurosis." *American Sociological Review* 9 (1944): 380-384. (邦訳「神経症の個人的起源と社会的起源」、『権威と家族』(安田一郎訳、青土社)に収録。)
- Man for Himself An Inquiry into the Psychology of Ethics*. New York: Rinehart & Co., quoted here from the paperback edition New York: Fawcett Premier, 1965 (邦訳、『人間における自由』(谷口隆之助、早坂泰次郎訳、東京創元社))
- "The Oedipus Complex and the Oedipus Myth." In: Ruth Nanda Anshen, ed. *The Family. Its Functions and Destiny*. New York: Harper & Bros,

- 1949 (Identical to "Oedipus Myth" *Scientific American* 18 [1949]: 22-27, also in: *The Forgotten Language*, pp. 196-230.)
- Psychoanalysis and Religion*. New Haven: Yale University Press, 1950. (邦訳、『精神分析と宗教』(谷口隆之助、早坂泰次郎訳、東京創元社))
- Suzuki, D. T. and De Martino, Richard. *Zen Buddhism and Psychoanalysis*. New York: Harper & Row, 1950 (邦訳、『禅と精神分析』(小堀宗柏他訳、東京創元社))
- The Forgotten Language. An Introduction to the Understanding of Dreams, Fairy Tales and Myths*. New York: Rinehart & Co., 1951. (邦訳、『夢の精神分析』(外林大作訳、東京創元社))
- "The Human Implications of Instinctivistic Radicalism A Reply to Herbert Marcuse." *Dissent* 2 (Summer, 1955) 342-349.
- The Sane Society*. New York: Rinehart & Winston, 1955; quoted here from the paperback edition: New York: Fawcett, 1962. (邦訳、『正気の社会』(加藤正明、佐瀬隆夫訳、社会思想社))
- "A Counter-Reply to Herbert Marcuse" *Dissent* 3 (Winter, 1956): 81-83.
- The Art of Loving*. World Perspectives, vol. 9 New York: Harper & Row, 1956. quoted here from the paperback edition: New York: Perennial Library, 1974. (邦訳、『愛するということ』(鈴木晶訳、紀伊国屋書店))
- Sigmund Freud's Mission An Analysis of His Personality and Influence*. New York: Harper & Row, 1959 (邦訳、『フロイトの使命』(佐治守夫訳、みすず書房))
- "The Case for Unilateral Disarmament" *Daedalus* (Fall, 1960): 1015-1028 Also in *On Disobedience and Other Essays*, pp. 102-119. (邦訳、『反抗と自由』(佐野哲郎訳、紀伊国屋書店))
- and Herzfeld, Hans, in collaboration with Kurt R. Grossmann, eds. *Der Riede Idee und Verwirklichung The Search for Peace*. Festgabe für Adolf Leschnitzer. Heidelberg: Lambert Schneider, 1961.
- Marx's Concept of Man. With a Translation from Marx's Economic and Philosophical Manuscripts* by T. B. Bottomore. New York: Frederick Ungar, 1961. (邦訳、『マルクスの人間観』(榎俊雄、石川康子訳、合同出版))



- 28,31
 ロレンツ Konrad Lorenz 184, 250,
 274 以下
 『進化と人間行動の修正』 Evolution
 and Modification of Behavior 274
 『攻撃』 On Aggression 250, 274
 ロベスピエール Maximilien Francois-
 sidore De Robespierre 122, 249

ワ行

- ワトソン John Broadus Watson 276
 『行動—比較心理学入門』 Behavior:
 An introduction to Comparative
 Psychology 276

文献目録

I エーリッヒ・フロムによる著作 (年代順)

- Das jüdische Gesetz. Ein Beitrag zur Soziologie des Diasporajudentums.*
 Doctoral dissertation, University of Heidelberg, 1925. Typescript.
- "Der Sabbath." *Imago. Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf die Natur- und Geisteswissenschaften* 13 (1927): 223-234.
- "Psychoanalyse und Soziologie." *Zeitschrift für psychoanalytische Pädagogik* 3(1928/29): 269f.
- "Die Entwicklung des Christudogmas. Eine psychoanalytische Studie zur sozialpsychologischen Funktion der Religion." *Imago. Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf die Natur- und Geisteswissenschaften* 16 (1930): 305-373 (邦訳「キリスト論教義の変遷」、『革命的人間』(谷口隆之助訳、東京創元社)に収録。)
- "Politik und Psychoanalyse." *Psychoanalytische Bewegung* 3 (1931): 440-447
- "Die psychoanalytische Charakterologie und ihre Bedeutung für die Sozialpsychologie." *Zeitschrift für Sozialforschung* 1 (1932): 253-277. (邦訳「精神分析的な性格学とその社会心理学との関係」、『精神分析の危機』(岡部慶三訳、東京創元社)に収録。)
- "Über Methode und Aufgabe einer analytischen Sozialpsychologie" *Zeitschrift für Sozialforschung* 1 (1932): 28-54 (邦訳「分析的な社会心理学の方法と課題」、『精神分析の危機』(岡部慶三訳、東京創元社)に収録。)
- "Robert Briffaults Werk über das Mutterrecht." *Zeitschrift für Sozialforschung* 2 (1933): 382-387. (邦訳「ロバート・ブリフォルトの母権についての著作」、『権威と家族』(安田一郎訳、青土社)に収録。)
- "Die sozialpsychologische Bedeutung der Mutterrechtstheorie." *Zeitschrift für Sozialforschung* 3 (1934): 196-227. (邦訳「母権理論とその社会心理学との関連」、『精神分析の危機』(岡部慶三訳、東京創元社)に収録。)



- 119, 263, 63 (注19)
『メキシコの一村落における社会的性格』(ミッシェル・マッコビーと共著) (with Michael Maccoby.) Social Character in a Mexican Village 57, 129, 131, 185
『ユダヤ教の人間観』 You Shall Be as Gods 27, 93, 124, 145, 186~191, 235
「ユダヤの掟—ディアスポラ・ユダヤ教の社会学に関する一考察」(学位論文) "Jewish Law. A Contribution to the Sociology of Diaspora Judaism" (dissertation) 32, 39, 120
『夢の精神分析』 The Forgotten Language 93, 130~138, 143, 148
「利己主義と自己愛」 "Selfishness and Self-love" 80, 96 (注21)
「我々の時代のヴィジョン」 "The Vision of Our Time" 272
「我々はヒトラーを憎むべきか?」 "Should We Hate Hitler?" 195
フンク Rainer Funk 16, 44, 264, 271, 41 (注1), 42 (注5), 42 (10), 62 (注1), 64 (注29), 127 (注1), 127 (注5), 222 (注9), 267 (注1), 269 (注43)
ペイン Robert Payne 287
『アドルフ・ヒトラーの生涯と死』 The Life and Death of Adolf Hitler 293 (注29)
ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel 46, 70, 152, 153, 154
ベーコン Francis Bacon 172
『ニュー・アトランティス』 New Atlantis 172
ベンヤミン Walter Benjamin 31以下, 98
ホーナイ Karen Horney 34, 66以下, 68, 83以下, 106, 111, 123, 138, 96 (注27)
『現代の神経症的性格』 The Neurotic Personality of Our Time 66, 83, 96 (注27)
『精神分析の新しい道』 New Ways in Psychoanalysis 96 (注27)

- 『心の葛藤』 Our Inner Conflicts 84, 96 (注28)
ボットモア T. B. Bottomore 149, 219, 160 (注40)
ホルクハイマー Max Horkheimer 34以下, 37, 40以下, 43~49, 53, 59以下, 61, 65, 70, 91, 99, 120, 162, 170, 190, 206, 239, 187以下, 273, 63 (注17)
『歴史と心理学』 "History and Psychology" (講演) 47以下
『権威と家族にかんする研究』(編集) (ed) Studien über Autorität und Familie 57
ボルケナウ Franz Borkenau 40, 48, 70, 239, 62 (注7), 95 (注5)
『封建の世界像からブルジョワの世界像への移行』 The Transition from the Feudal to the Bourgeois World View 70, 95 (注5)
ポロツク Friedrich Pollok 40, 57, 58, 60
ボーンズ Wolfgang Bonss 63 (注21), 64 (注30)

マ行

- マーカス Judith Marcus 22 (注4), 63 (注24), 193 (注30)
マイモニデス Moses Maimonides 187以下, 191, 235
マッカーシー Eugene MxCarthy 219, 220, 227, 228, 246
マッコビー Michael Macoby 185, 212, 213, 220, 249, 260, 63 (注25)
マハテータ Nyanaponika Mahathera 145, 271
『仏教の黙想の心』 The Heart of Buddhist Meditation 271
マラッヒー Patrick Mullahey 92, 97 (注39)
マルターゼ Herbert Marcuse 16, 60, 61, 82, 114, 138以下, 207, 219, 239, 249, 127 (注12)
『エロスの文明』 Eros and Civilization 138以下, 249
『一次元的人間』 One Dimensional Man 82, 249, 127 (注12)

- マルクス Karl Marx 34, 37, 40, 46, 48, 70, 75, 78, 82, 94, 105, 121, 148~157, 205, 215, 226, 238~243, 247, 257以下, 258, 260
『資本主義経済批判』 The Critique of Capitalist Economy 154
『経済学・哲学草稿』 Economic and Philosophical Manuscripts 149, 154
『資本論』 Das Kapital 154
マルセル Gabriel Marcel 254, 259
『存在と所有』 Being and Having 254
マンハイム Karl Mannheim 115, 127 (注16)
『イデオロギーとユートピア』 Ideology and Utopia 127 (注16)
マンフォード Lewis Mumford 249
『正気の名にかけて』 In the Name of Sanity 249
『機械の神話』 The Myth of the Machine 249
メイヤー Elton Mayor 205
『産業文明の人間の諸問題』 The Human Problems of an Industrial Civilization 205
メロール Mellor, W. 206, 223 (注21)
モア Thomas Morus 172
『ユートピア』 Utopia 172
モーリス Desmond Morris 250
『裸の猿』 The Naked Ape 250
モゼ Hilde L. Mosse 142, 159 (注26), 235 (注27)
モンタギュー M F. Ashley Montagu 92, 97 (注39)

ヤ行

- ヤスパーズ Karl Jaspers 31, 170, 192 (注11)
ユング C G Jung 100, 121, 126, 132, 133, 134, 140, 165, 234, 245以下, 127 (注3)
『心理学と宗教』 Psychology and Religion 100, 127 (注3)

ラ行

- ライト Quincy Wright 280

- 『戦争の研究』 A Study of War 280
ライヒ Wilhelm Reich 34, 38, 74, 279, 95 (注10)
『性格分析—その技法と理論』 Character Analysis: Technique and Foundations 279
『ファシズムの集団心理』 The Mass Psychology of Fascism 74, 279, 95 (注10)
ライヒマン—フロム Frieda Reichmann-Frohm (wife) 35, 38, 44, 69
ライフ Adelbert Reif 265, 290, 97 (注34)
ラスウェル Harold D Lasswell 85, 96 (注30)
『政治学—誰が、何を、いつ、どうやって、獲得するのか』 Politics. Who Gets What, When, How 96 (注30)
ラハーター Johann Kaspar Lavater 167
『人間認識と博愛の改善のための人相学的断章』 Physiognomische Fragmenten (I) 167
ラビンコフ Salman Baruch Rabinkov 27, 33
ランダウアー Karl Landauer 34, 36, 47, 66, 279, 95 (注10)
ランドイス Bernard Landis 219, 21 (注1)
リースマン David Riesman 212, 219
ルクセンブルグ Rosa Luxemburg 30以下, 241
ルビンス Jack L. Rubins 94 (注2), 95 (注4)
『カレン・ホーナイ—精神分析の初歩』 Karen Horney—Gentle Rebel of Psychoanalysis 94 (注2)
レーガン Ronald Reagan 177, 221
レーデラー William J. Lederer 211
『羊のようなアメリカ人』 A Nation of Sheep 211
レーニン Vladimir Ilyich Lenin 214, 241, 284
ローヴェンタール Leo Lowenthal 24, 32, 35, 40, 58, 60, 121
ローゼンツヴァイグ Franz Rosenzweig

ブロッカ Alan Bullock 287
『ヒットラー—専制政治の研究』
Hitler: A Study in Tyranny 294 (注
28)
ブロッカ Ernst Bloch 28, 157, 219, 248
『希望の原理』 The Principle of
Hope 248
『ユートピアの精神』 Spirit of Utopia
248
フロム Erich Fromm
国家社会主義 national socialism 80,
84 以下, 120 以下, 195 以下
自発性 spontaneity 89, 229~237
社会主義 socialism 16, 18 以下,
149~157, 206~209, 210~219, 222, 245
以下, 255 以下
社会的性格 social character 33, 47,
50, 53~56, 73~76, 85~88, 98, 163~
185, 199~206, 210, 230~237, 245~
246, 259~263, 270 以下, 281
神秘主義 mysticism 27, 101~104,
125~126, 145~148
性格の構え character orientation
107~117, 163~185, 199~205, 226,
229~237, 255~263, 281~283, 289, 290
政治的行動 political action 18 以下,
29 以下, 194, 210~221
神分析的方法論 psychoanalytical
methodology 38, 48 以下, 135, 136 以
下, 271 以下
生命愛的/死体愛的構え biophilous/n-
ecrophilous orientation 21, 29 以下,
83 以下, 115, 161, 164~176, 179~184,
226, 281~288, 289
タルムード the talmud 17, 25 以下,
72, 226
仏教 buddhism 27, 38, 99, 101 以下,
122 以下, 124, 144~148, 271
母系制 matriarchy 51 以下, 135 以下
マルクス主義 marxism 28, 34, 37,
39, 40, 45, 46, 48 以下, 148~157, 214 以
下, 238~243
ユートピア思想 utopian thought
17 以下, 172, 250~254, 258, 260 以下,
266
ユダヤ教 judaism 17 以下, 25 以

下, 31 以下, 38 以下, 101, 146, 189 以
下, 289
Works 作品
『愛するということ』 The Art of
Loving 81, 89, 93, 94, 104, 115, 123,
138, 161, 168, 184, 226, 227, 229~237,
256
『悪について』 The Heart of Man
53, 83, 93, 109, 115, 144, 145, 161~185,
186, 189, 195, 170, 256, 260, 280, 281,
284, 285
『安息日』 "Der Sabbath" 39 以下,
189 以下
『生きるということ』 To Have or to
Be? 26, 51, 93, 94, 144, 146, 153, 183,
227, 228, 253~265, 286, 272
『ヴァイマル・ドイツの労働者階級
—心理学的社会学的研究—』 The
Working Class in Weimar Germany
56 以下, 61, 73, 85, 175, 195
『エディプス・コンプレックスとエ
ディプス神話』 "The Oedipus Com-
plex and the Oedipus Myth" 158 (注
8)
『希望の革命』 The Revolution of
Hope 20, 93, 94, 198, 207, 215, 218,
220 以下, 226, 227, 246~254, 261
『キリストの教義の発展』 "On the
Development of the Dogma of Chris-
t" 48, 120
『キリストのドグマ』 The Dogma of
Christ 140
『寂寥と行動』 Beyond the Chains of
Illusion 93, 94, 157, 226, 227, 238~247
『緊張緩和と政策についての所見』
Remarks on the Policy of Dötante
218
『攻撃と性格』 Aggression and Cha-
rakter 290 以下
『社会主義ヒューマニズム』 Socialist
Humanism 219
『自由からの逃走』 Escape From
Freedom 18, 26, 43, 48, 53, 57, 65~
94, 98, 99, 104, 105, 107, 110, 114, 117,
122, 161, 172, 173, 180, 195, 225, 243,
258, 281

『正気社会』 The Sane Society
53, 93, 172, 198~210, 211, 218, 226,
231, 247, 249, 251 以下, 258, 260, 261,
264, 280
『神経症の個人的起源と社会的起源』
"Individual and Social Origins of
Neurosis" 111, 127 (注10)
『性格特性としての信念』 "Faith as a
Character Trait" 120, 128 (注23)
『政治と精神分析』 "Politics and
Psychoanalysis" 62 (注11)
『精神分析—科学か党派か?』 "Psy-
choanalysis—Science or Party Line?"
140
『精神分析的な性格学とその社会心理学的
意義』 "The Psychoanalytical Char-
acterology and its Relevance to
Social Psychology" 50, 73, 62 (注12)
『精神分析と社会学』 "Psychoanalysis
and Sociology" 39
『精神分析と宗教』 Psychoanalysis and
Religion 93, 100~102, 104, 120~126,
168, 188, 236
『精神分析の危機』 The Crisis of
Psychoanalysis (book) (本) 143, 270
『精神分析の危機』 "The Crisis of
Psychoanalysis" (article) (論文) 270
『精神分析療法の社会的制約』 "Die
Gesellschaftliche Bedingtheit der
Psychoanalytischen Theorie" 51 以
下, 143, 63 (注16)
『禅と精神分析』 Zen Buddhism and
Psychoanalysis 93, 123, 129, 144~
148, 188, 253, 271
『人間における自由』 Man for Him-
self 81, 89, 93, 100, 104~120, 122, 123,
131, 162, 168, 170, 171, 172, 173, 174,
180, 185, 190, 226, 229, 232, 256
『人間の勝利を求めて』 May Man
Prevail? 53, 93, 214~218, 226, 247
『人間のなかにある戦争: 破壊の根源
にたいする心理学的探求』 "War
Within Man: A Psychological Inquiry
into the Roots of Destructiveness"
161
『人間を取り戻すために—社会党宣言

と綱領』 Let Man Prevail: A Socia-
list Manifesto and Program 211
『破壊』 The Anatomy of Human
Destructiveness 30, 54, 84, 85, 93,
109, 161, 166, 180, 182, 227, 266, 270,
273~290
『反抗と自由』 On Disobedience 211
『犯罪者と社会の心理学』 "On the
Psychology of Criminals and Socie-
ty" 48
『フロイトにおける人間のモデル, お
よびその社会的背景』 "Freud's Mod-
el of Man and its Social Determina-
nts" (邦訳)『精神分析の危機』に収録,
143
『フロイトの使命』 Sigmund Freud's
Mission 52, 93, 108, 138, 139~143,
148, 149, 226, 241
『フロイトを越えて』 Greatness and
Limitation of Freud's Thought 52,
93, 139, 143~144
『分析的心理学の方法と課題』 "On
the Methods and Goals of Analytical
Social Psychology" 47~50, 73
『母権制についてのロバート・ブリ
ッファルトの作品』 "Robert Briffault's
Werk Über Das Mutterrecht" 62 (注
14)
『母権制理論の社会心理学的意義』
"Die Sozialpsychologische Bedeutung
Der Mutterrechtstheorie" 51 以下
『保証された所得の心理学的側面』
"The Psychological Aspects of Guar-
anteed Income" 208
『マルクスの人間観』 Marx's Concept
of Man 93, 148~157, 162, 163, 198,
214, 226, 241, 264
『マルクスの人間の知識に対する貢献』
Marx's Contribution to the Knowl-
edge of Man" 158
『民間防衛問題にかんする論争』 (マッ
コビー・Mと共著) (with M. Macco-
by:) "A Debate on the Question of
Civil Defense" 213
『無力の感情』 "The Feeling of
Powerlessness" 52~56, 73 以下,

- 下, 24, 52, 66, 137, 239
 ゲーテ Johann Wolfgang Von Goethe 2
 43 以下
 『ファウスト』 Faust 243 以下
 ギッペルス Joseph Gobbels 84
 『ミハエル』 Michael 85
 ケナン George F. Kennan 213, 223 (注
 28)
 『核と西歌』 The Atom and the
 West 223 (注28)
 ケネディ, ロバート Robert Kennedy
 219, 246
 コール George Douglas Howard Cole
 206, 223 (注21) (and W. Mellor) (メ
 ラ, Wとの共著)
 『産業的自由の意味』 The meaning
 of Industrial Freedom 223 (注21)

サ行

- サリヴァン Harry Stack Sullivan 66,
 68, 69, 107, 120, 137, 138, 179, 201, 209,
 245, 273, 96 (注22)
 『現代精神医学の概念』 Conception of
 Modern Psychiatry 96 (注22)
 サルトル Jean-Paul Sartre 163, 191
 (注2)
 ジェイ Martin Jay 58, 22 (注4), 62
 (注3), 63 (注26), 64 (注28), 64
 (注29), 94 (注1)
 シャイラー William L. Shirer 219
 『第三帝国の興亡』 The Rise And
 Fall of the Third Reich 293 (注26)
 シュハテル, エルンスト Ernst G
 Schachtel (also: Ernest) 58, 66, 91 以
 下, 130, 97 (注36)
 シューマッハ E. F. Schumacher 255,
 260
 『スモール イズ ビューティフル』
 Small is Beautiful 194
 シュターヘリン Balthasar Staehelin
 194
 『所有と存在』 Haban und Sein 194
 シュティルナー Max Stirner 257
 『エゴと彼自身—権威に抗する個人の
 場合』 The Ego and His Own: The
 Case of the Individual Against Aut-

- hority 257
 シュバイツァー Albert Schweitzer
 168, 205
 『文明の哲学』 Philosophy of Civiliza-
 tion 205 以下
 スピア Albert Speer 286
 『第三帝国の内側』 Inside the Third
 Reich 286
 ショーレム Gershom Scholem (also:
 Gerschom Scholem) 28 以下, 32, 42
 (注6), 192 (注6)
 ジョーンズ Ernest Jones 139
 『ジグムント・フロイトの人と作品』
 The Life and Works of Sigmund
 Freud 139
 シルヴァーバーグ William Silverberb
 66, 67, 69
 シャール John H. Schaar 91, 177, 97
 (注38), 192 (注16)
 スキナー Burrhus F. Skinner 276 以
 下
 『科学と人間行動』 Science and
 Human Behavior 276 以下
 『ワーデン ツウ』 Waldon Two
 276 以下
 鈴木 大拙 Suzuki Daisetsu Teitaro
 122 以下, 129, 144, 158 (注10)
 『禅により生きる』 Living by Zen
 122
 『禅宗の方法』 Manual of Zen Bud-
 dhism 122
 『禅の研究』 Studies in Zen 122
 スターリン Joseph Stalin (i. e. Iosif
 Vissarionovich Dzugashvili) 155, 163,
 165, 167, 175, 214, 277, 282 以下, 289
 スピノザ Benedictus Spinoza 101,
 103, 105, 115, 118, 152, 232, 258
 『エチカ』 (倫理学) Ethics 103 以下
 ソポクレス Sophocles 118, 135
 『アンティゴネ』 Antigone 135
 『コロススのエディプス』 Oedipus at
 Colonnus 135
 『エディプス王』 Oedipus Rex 135

タ行

- タール Zoltan Tar 22 (注4), 62 (注

- 3), 63 (注24), 64 (注28), 193 (注
 30)
 タウバー Edward S. Tauber 144,
 219, 21 (注1)
 タルムード Talmud 17, 23, 24 以下,
 31, 72, 89, 101, 132, 226
 タンネンバウム Frank Tannenbaum
 205, 223 (注18)
 『労働の哲学』 A Philosophy of Labor
 223 (注18)
 チャーチル Winston Churchill 167,
 285
 デ・マルチーノ Richard De Martino
 123, 144, 158 (注10)
 デ・マン Henrik De Man 34, 37 以下
 『マルクス主義の心理学』 The Psych-
 ology of Marxism 37
 ティリッヒ Paul Tillich 69, 124, 155,
 182, 209, 248, 160 (注45)
 『プロテスタンティズムのヴィジョン』
 Protestantische Vision 160 (注45)
 トーニー Richard Henry Tawney 78,
 205, 257, 95 (注18)
 『獲得社会』 The Acquisitive Socie-
 ty 205
 『宗教と資本主義の興隆』 Religion
 and the Rise of Capitalism. 95 (注
 18)
 トーレス Mauro Torres 128 (注17),
 128 (注31), 159 (注18), 160 (注37)
 トレバローパー H. R. Trevor-Roper
 287
 『ヒットラーの最期』 The Last Days
 of Hitler 283 (注27)
 トンプソン Clara M. Thompson 66,
 67, 68, 70, 130

ナ行

- ニクソン Richard M. Nixon 220, 228
 ノーベル Nehemiah Anton Nobel 27
 以下, 41

ハ行

- ハイデガー Martin Heidegger 163,
 259
 ハウズドルフ Don Hasdorff 115, 131,

- 136, 140, 147, 184, 234, 22 (注2), 127
 (注14), 128 (注30), 157 (注1),
 157 (注2), 158 (注9), 159 (注21),
 159 (注25), 160 (注30), 160 (注
 35), 160, (注36), 193 (注24), 193
 (注26), 224 (注39), 267 (注11)
 ハックスリー Aldous Huxley 156,
 173, 203, 205
 『すばらしき新世界』 Brave New
 World 203, 205
 バッホーフエン Johann Jacob Bac-
 hofen, 38, 51, 106, 135
 『母権』 Mutterrecht 51
 ハモンド Guyton B Hammond 163,
 192 (注3), 193 (注20), 193 (注22)
 ハンフリー Hubert H. Humphrey
 220, 228, 247
 ヒットラー Adolf Hitler 85, 163, 165 以
 下, 167, 175, 278, 285~287, 289
 『我が闘争』 Mein Kampf 288
 ヒムラー Henrich Himmler 283 以下,
 287
 ブーバー Martin Buber 28, 32, 37, 58,
 115
 『我と汝』 I and Thou 32
 フェレンチ Sandor Ferenczi (also:
 Ferenczy) 37, 52, 137, 139, 239
 フェイエルバッハ Ludwig Feuerbach
 155, 168, 169
 プラトン Plato 172, 232
 『饗宴』 Symposium 232
 フリーマンフロム Annis Freeman
 Fromm (wife) 101, 273
 フルンチョフ Nikita Kruschev 155,
 215
 フロイト Sigmund Freud 15, 20, 34 以
 下, 37 以下, 48, 50, 51 以下, 75, 86,
 94, 106, 107, 110, 121, 132, 134, 135,
 137, 138~144, 152, 163, 168, 169, 170,
 180, 197, 205, 226, 235, 238~243, 273, 2
 74, 192 (注9)
 『夢判断』 The Interpretation of
 Dream 141
 『統精神分析入門』 New Introductory
 Lectures on Psychoanalysis 192 (注
 9)



訳者紹介

たきざわまさき
滝沢正樹

1931年 東京生まれ。
1955年 一橋大学社会学部卒業
現在 関東学院大学経済学部教授
専攻 社会心理学、マス・コミュニケーション論
著書 『コミュニケーションの社会理論』（新評論、1976年）
『現代日本人の実像』（新評論、1990年）ほか。
訳書 H・キャントリル『社会運動の心理学』（共訳、岩波書店、1959年）
G・H・ミード『精神・自我・社会』（共訳、青木書店、1973年）
住所 〒158 東京都世田谷区中町1-9-21

きのしにからや
木下一哉

1953年 富山生まれ。
1975年 慶應義塾大学法学部卒業
現在 翻訳家
住所 〒107 東京都港区南青山1-11-29セゾン南青山101

評伝エーリッヒ・フロム

(換印廃止)

1994年3月31日 初版第1刷発行

訳者 滝沢正樹
木下一哉
発行者 二瓶一郎

発行所 株式会社 新評論

〒169 東京都新宿区西早稲田3-16-28 電話 東京(3202)7391番
振替 東京 6-113487番

定価はカバーに表示してあります 印刷 新栄堂
落丁・乱丁本はお取り替えます 製本 河上製本

©滝沢正樹・木下一哉 1994

Printed in Japan

ISBN4-7948-0210-2 C1011

索引

ア行

アインシュタイン Albert Einstein 205,241
アドルノ Theodor W Adorno 24,41, 47,58 以下,59,61,85,82,170,190, 239,273,63 (注24), 193 (注30)
『権威主義的パーソナリティ』 The Authoritarian Personality 57
『否定的弁証法』 Negative Dialectics 190,193 (注30)
アリストテレス Aristotle 101,104, 105,114,118,232,258
『コマコス倫理学』 Nicomachian Ethics 101
アンシェン Ruth Nanda Anshen 148,162,228,238,158 (注8)
ヴィトフォォーゲル Karl August Wittfogel 40
ヴェーバー, アルフレッド Alfred Weber 31,33
ヴェーバー, マックス Max Weber 31,80,96 (注20)
『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 The Protestant Ethics and the Spirit of Capitalism 96 (注20)
ヴェルトハイマー Max Wertheimer 115,127 (注15)
『生産的思考』 Productive Thinking 127 (注15)
ウナムーノ Miguel De Unamuno 164, 284
エヴァンス Richard I. Ebans 135, 137,138,194,158 (注6),158 (注7), 158 (注11), 158 (注14), 159 (注16), 159 (注17), 222 (注1)
エーリッヒ・ポール Paul R. Ehrlich 260
『ヒューマン・エコロジーの世界—人口、資源、環境』 Population, Resources, Environment: Essays in Human Ecology 261
エックハルト Master Eckhart 27,101

カ行

以下, 115,145,187,232,235,257,258
エールル Jacques Ellul 249
『技術社会』 The Technological Society 249
エンゲルス Friedrich Engels 51,151, 153,215,241
オーウェル George Orwell 127,203
『1984年』 1984 203
オスグッド Charles E. Osgood 212, 223 (注27)

カーディナー Abram Kardiner 66,67, 94 (注3)
『個人と社会』 The Individual and His Society 67,94 (注3)
カール Hermann Kahn 213,216 以下
『水素爆弾戦争』 On Thermonuclear War 213
カフカ Franz Kafka 118,135 以下
『審判』 The Trial 135 以下
カルヴィン Johannes Calvin 80,118
カンパネラ Tommaso Campanella 172
『太陽の街』 The City of the Sun 172
キッシンジャー Henry A. Kissinger 216,224 (注34)
『選択の必然性』 The Necessity for Choice 224 (注34)
旧約聖書 Old Testament 17,27, 186,191
ギルダー George Gilder 221 以下, 224 (注40)
『富と貧困』 Wealth and Poverty 221,224 (注40)
クラカウアー Siegfried Kracauer 28
『カリガリからヒットラーへ』 From Caligari to Hitler 28
『科学としての社会学』 Sociology as Science 28
グルラントーフロム Henny Guriland Fromm (wife) 98 以下, 100,101, 120
クレペリン Emil Kraepelin 34,170
グロデック George Groddeck 36 以下



Property of the Erich Fromm Document Center. For personal use only. Citation or publication of material prohibited without express written permission of the copyright holder.
Eigentum des Erich Fromm Dokumentationszentrums. Nutzung nur für persönliche Zwecke.
Veröffentlichungen - auch von Teilen - bedürfen der schriftlichen Erlaubnis des Rechteinhabers.



滝沢正樹 現代日本人の実像
——コミュニケーションの社会学論——
三〇〇〇円

須原一秀 超越 錯覚
人はなぜ解にかまえるか
二二〇〇円

斎藤瑛子 世界地図から消えた国
——東ドイツへのレクイエム——
一六〇〇円

アンドレ・ゴルツ 資本主義・社会主義・エコロジー
杉村裕史 訳 二五七五円